

---

# 機動戦士ガンダムSEED Zero

エミリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED Zero

### 【Nコード】

N3660M

### 【作者名】

エミリア

### 【あらすじ】

神の不注意で死んでしまった少女がガンダムSEEDの世界に立つ物語。

このSSは基本的にキラ×オリ主となっています。キラ×ラクス以外認めないという方は全力でUターンして下さい。

## ロックフォード家設定（種期）

オリジナル主人公

### 【名前／愛称】

シルヴィア＝ロックフォード／シルヴィ

### 【外見モデル】

機動戦士ガンダム00のティエリア＝アーデ（女装ver）

### 【遺伝子分類】

ナチュラル（純粹種のイノベーター）

### 【誕生日／星座】

C.E.55年9月10日／乙女座

### 【年齢／身長／体重】

16歳／156cm／41kg

### 【髪色／髪型／髪質】

濃紫色／ロングヘア（ガンダムWのデュオ・マックスウェルの様な大きな三つ編みにしている）／ストレート

### 【瞳】

オッドアイ（右：赤、左：青。イノベーターとして覚醒している時は両目とも虹彩が金色に輝く）

### 【好きな食べ物】

甘い物

【趣味】

システム構築、ハッキング、無能のくせに偉そうにしている人間を見下すこと

【役職】

民間人 一級戦時特別佐官（一級特佐：大佐、及び一佐相当権限保有）「地球軍&オーブ軍」

【立場】

ロックフォード財団総帥、？プトレマイオス2？艦長（C・E・71）

【出身地／国籍】

アイルランド／アイルランド オーブ

【能力】

スーパーコーディネーター並みの能力（技術力や知能etc）  
SEED覚醒  
イノベーターとしての能力（脳量子波使用etc）

【搭乗機（愛機）の変遷】

？アヴァランチエクシア・C？ カスタム  
？ダブルオーザンライザー セランソード  
7S/  
G？

【キャラ補足】

神のミスにより死にガンダムSEEDの世界にトリップ（憑依）させられた人間。神に殺される前は女子高生のガンダムオタク。

ガンダムオタクと言っても知識は浅く、ガンダムW、ガンダムX、ガンダムSEED&Destiny、ガンダム00しか見たことが

ない。

SEED世界に行く前に神にスーパーコーディネーターとイノベーターの能力、？ダブルオーザンライザー7S/G？etcが与えられている。（他のガンダムシリーズに登場する兵器やコードギアスなどの機動兵器や宇宙戦艦が登場する物語の兵器や動力炉などの構造・設計知識も叩き込まれている）

SEED世界での立場はアイルランドで大企業であったロックフォード社の社長令嬢。しかし、9歳の時に企業間パーティに参加している時にブルーコスモスのテロに巻き込まれ、両親と死別。両親以外に親族はおらず。

両親が身を呈して守ったことで外傷はなかったが、目の前で両親が死んでしまったことで本物のシルヴィアの精神が死んでしまい、主人公が憑依するまで半年ほど意識が戻らず寝たきりだった。

覚醒（憑依）後、1カ月も経たずにロックフォード社の社長に就任。血の繋がらない同じ境遇の女の子4人を妹とし、10歳の時に妹達と社員、屋敷で雇っていた使用人達と共にオーブに移住。

12歳の時に妹達と共にロックフォード社を世界的影響力を持つ財団にまで発展させた。

ロックフォード財団に置いて本社勤務をしているのはシルヴィアと妹達だけで、それ以外の人間の職員はおらず、ヒロインに従順な大量のハ口によって経営・商品開発などが行われている。

ロックフォード社時代から働いている社員は全員支社で勤務しており、支社ですらモルゲンレーテを凌駕する技術力を持っている。

好きになった人<sup>キラ</sup>や家族、友達、仲間には優しい少女だが、それ以外の人間には基本的に興味を持たず、能力もないくせに偉そうにしている人間を見下す癖がある。（興味のない人間＝雑種、能力のない偉そう振った人間＝駄犬と蔑む）

ヒロインの手によって？ダブルオーザンライザー7S/G？は改造され、コードギアスに登場する防御兵装？絶対守護領域？などが使えるようになる他、地球の重力でオリジナルの？GNDライヴ？が

作られたりする。

オリジナルヒロイン？

【名前】

アリアⅡロックフォード

【外見モデル】

機動戦士ガンダム00のクリスティナⅡシエラ

【遺伝子分類】

ナチュラル

【誕生日／星座】

C.E.55年10月10日／天秤座

【年齢／身長／体重】

16歳／157cm／40kg「種」

【髪色／髪型／髪質】

茶色／ロングヘア／癖毛

【瞳】

黄土色

【好きな食べ物】

甘い物

【趣味】

ハッキング、クラッキング、医療研究

【役職】

民間人 一級戦時特別尉官（一級特尉：一尉相当権限保有）「オーブ軍」

【立場】

ロックフォード財団医療製品開発部門最高責任者、？ブトレマイオス2？CIEC

【出身地／国籍】

イギリス／イギリス オーブ

【能力】

コーディネーター並みのソフト面での技術力

【搭乗機の変遷】

？ガンダムキュリオス？？アリオスガンダムGNHW/M？

【キャラ補足】

ジャンク屋一家の娘でマリアの姉。イタリアに家族で商売に来ていた際にブルーコスモスのテロに巻き込まれ、両親と死別し、マリアと共に孤児となった。

両親との死別後、シルヴィアに拾われ、血の繋がらない姉のエミリアとアリス、実妹のマリアと共にオーブに渡り、姉妹と社員全員の力でロックフォード社を財団にまで発展させ、医療系に興味があった為、C・E・71の時点で医療部門の最高責任者になっている。C・E・71に起こった大戦ではロックフォード製の戦艦のCIEC、及び艦載機のパイロットを務めている。

元がジャンク屋だった為、解析などの技術はコーディネーター並み。

また、反射神経に関してはスーパーコーディネーター並であり、妹のマリアとは機動新世紀ガンダムXのフロスト兄弟の様な精神リンクが可能。

オリジナルヒロイン？

【名前／愛称】

エミリアⅡ ロックフォード／エミリイ

【外見モデル】

機動戦士ガンダム00のアニューⅡリターナー

【遺伝子分類】

コーディネーター（一世代目）

【誕生日／星座】

C.E.56年6月4日／双子座

【年齢／身長／体重】

15歳／157cm／39kg

【髪色／髪型／髪質】

薄紫色／ロングヘア／柔らかい癖毛

【瞳】

金色

【好きな食べ物】

甘い物



【趣味】

ハッキング、システム構築

【役職】

民間人 一級戦時特別尉官（一級特尉：一尉相当権限保有）「オーブ軍」

【立場】

ロックフォード財団電子機器&自動車開発部門最高責任者、？プロマイオス2？操舵士

【出身地／国籍】

イタリア／イタリア オーブ

【搭乗機の変遷】

？ガンダムヴァーチェ（ガンダムナドレ）？？セラヴィーガンダム  
セラフィムガンダム  
ΔGNHW／B？

【キャラ補足】

システムエンジニアの一人娘で、ドイツに家族で旅行に来ていた際にブルーコスモスのテロに巻き込まれ、両親と死別し、孤児となった。（両親はナチュラル）

両親との死別後、シルヴィアに拾われ、血の繋がらない姉のアリアと妹のアリス、マリアと共にオーブに渡り、姉妹と社員全員の力でロックフォード社を財団にまで発展させ、自動車と電子機器開発に興味があつた為、C・E・71の時点で電子機器開発と自動車開発の二部門の最高責任者になっている。

C・E・71に起こった大戦ではロックフォード製の戦艦の操舵士、及び艦載機のパイロットを務めている。

小さい頃に両親が仕事に忙しく、構ってもらえなかったことが原因で自宅のパソコンを弄るようになり、いつの間にか一流のクラッキング技術を手に入れた過去を持つ。

オリジナルヒロイン？

【名前】

アリス＝ロックフォード

【外見モデル】

機動戦士ガンダム00のソーマ＝ピリス（マリー＝パーファシー）

【遺伝子分類】

コーディネーター（一世代目）

【誕生日／星座】

C.E.56年8月17日／獅子座

【年齢／身長／体重】

15歳／156cm／46kg

【髪色／髪型／髪質】

銀色／ロングヘア／ストレート

【瞳】

金色

【好きな食べ物】

甘い物

【趣味】

システム構築、商品開発

【役職】

民間人 一級戦時特別尉官（一級特尉：一尉相当権限保有）「オーブ軍」

【立場】

ロックフォード財団日用商品開発&食品開発&流通部門最高責任者

【出身地/国籍】

フランス/フランス オーブ

【搭乗機（愛機）の変遷】

？ガンダムデユナメス？ ？ケルディムガンダムGNHW/R？

【キャラ補足】

戦場カメラマンとジャーナリストの一人娘で、イギリスに親の仕事で来ていた際にブルーコスモスのテロに巻き込まれ、両親と死別し、孤児となった。（両親はナチュラル）

両親との死別後、シルヴィアに拾われ、血の繋がらない姉のアリアとエミリア、妹のマリアと共にオーブに渡り、姉妹と社員全員の力でロックフォード社を財団にまで発展させ、日用品&食品開発と流通業に興味があった為、C・E・71の時点で日用商品開発と食品開発、流通の三部門の最高責任者になっている。

C・E・71に起こった大戦ではロックフォード製の戦艦の副操舵士、及び艦載機のパイロットを務めている。

オリジナルヒロイン？

【名前】

マリア＝ロックフォード

【外見モデル】

機動戦士ガンダム00のフェルト＝グレイス

【遺伝子分類】

ナチュラル

【誕生日／星座】

C.E.57年9月10日／乙女座

【年齢／身長／体重】

14歳／153cm／34kg

【髪色／髪型／髪質】

桃色／ロングヘア／癖毛

【瞳】

アクアブルー

【好きな食べ物】

甘い物

【趣味】

ハッキング、システム構築、ハロと遊ぶこと

【役職】

民間人 一級戦時特別尉官（一級特尉：一尉相当権限保有）「オーブ軍」

【立場】

ロックフォード財団兵器・防犯システム開発部門最高責任者、？  
プトレマイオス2？CIC

【出身地／国籍】

イギリス／イギリス オープ

【能力】

コーディネーター並みのソフト面での技術力

【搭乗機の変遷】

ガン  
？GNアーチャー？

【キャラ補足】

ジャンク屋一家の娘でアリアの妹。イタリアに家族で商売に来ていた際にブルーコスモスのテロに巻き込まれ、両親と死別し、孤児となった。

両親との死別後、シルヴィアに拾われ、実姉のアリアと血の繋がらない姉のエミリア、アリスと共にオープに渡り、姉妹と社員全員の力でロックフォード社を財団にまで発展させ、防犯に興味があつた為、C・E・71の時点で防犯システム開発部門の最高責任者になっている。

また、財団を守る力として、自社防衛用としてMSを含む兵器の開発を行う部門の最高責任者でもある。

C・E・71に起こった大戦ではロックフォード製の戦艦のCIC、及び艦載機のパイロットを務めている。

実姉のアリアと同じく、元がジャンク屋だった為、プログラミング

や解析などの技術はコーディネーター並み。また、思考速度に関してはスーパーコーディネーター並であり、姉のARIAとは機動新世紀ガンダムXのフロスト兄弟の様な精神リンクが可能。

## ロックフォード製戦艦設定（種期）

ロックフォード財団所有の母艦

### 【名称】

プトレマイオス2

### 【艦籍番号】

CBS - 74

### 【分類】

全領域対応型万能艦

### 【全高】

80 m

### 【全長】

265 m

### 【全幅】

95 m

### 【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

### 【動力源】

主機：対消滅機関×1      補機：プラズマエンジン×2、<sup>GNドライブ</sup>太陽炉×9（ガンダム格納時のみ）

## 【武装】

大型GNキャノン×4、小型GNキャノン×4、GNバルカン×4、GNミサイル×38、GN魚雷×4

## 【特殊機能】 システム

GNフィールドトランザム（ガンダム格納時以外も可能だが、持続時間が短い）  
TRANS AMシステム（ガンダム格納時以外も可能だが、持続時間が短い）

## 【乗艦者】

艦長：シルヴィア＝ロックフォード  
操舵士：エミリア＝ロックフォード、ハロ  
副操舵士：アリア＝ロックフォード、ハロ  
CIC：アリス＝ロックフォード、マリア＝ロックフォード、ハロ  
整備士：ハロ多数

## 【搭載機】

GN 0000GNHW/7SG?00ガンダムダブルオー7S/G?  
GNR 010/XN?ザンライザー（ザンユニット装備型オーライザー）?  
GN 000?0ガンダムオー?  
GN 001RE??ガンダムエクシアR??  
GNR 001E?GNアームズTYPE E?  
GN 006GNHW/R?ケルディムガンダムGNHW/R?  
GN 002?ガンダムデュナメス?  
GNR 001D?GNアームズTYPE D?  
GN 007GNHW/M?アリオスガンダムGNHW/M?  
GNR 101A?GNアーチャー?  
GN 003?ガンダムキュリオス?  
GN 008GNHW/B?セラヴィーガンダムGNHW/B?「



GN	009?	セラフィムガンダム?	GN	004?	ガンダムナ
GN	005?	ガンダムヴァーチェ?	GN		
ドレ?					
GNW	001?	ガンダムスローネアイン?			
GNW	002?	ガンダムスローネツヴァイ?			
GNW	003?	ガンダムスローネドライ?			

## ロックフォード製MS設定 ガンダムタイプ編 (種期)

第一世代型その？

### 【名称】

ダブルオー

セブンソード

00ザンライザー7S/G

ダブルオー

「00ガンダム7S/G+ザンライザー（ザンユニット装備型オーライザー）」

### 【型式番号】

ダブルオー

GN 0000GNHW/7SG「00ガンダム7S/G」+GN  
R 010/XN「ザンライザー」

### 【全高】

18.3m

### 【重量】

95.2t

### 【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

### 【動力源】

GNドライブ

ツインドライブ（太陽炉×2）×1、大型粒子貯蔵タンク×1

GNコンデンサー

### 【武装】

<標準装備>

GNバスターソード？×2、GNバスターソード？×1、GNソード？×1、GNソード？ロング×1

GNソード? ショート×1、GNソード? プラスター×1、GNビームサーベル×2、GNカッター×2  
GNバルカン×4、GNビームマシンガン×2、GNマイクロミサイル×8

<追加装備>

GNシールドビット×18、GNライフルビット×6、GNファン  
グ×10

### 【特殊機能】 システム

<標準機能>

生体認証システム

ツインドライブシステム

GNフィールド

ライザー  
RAISERシステム

トランザム  
TRANS AMシステム「TRANS AMバースト」

<追加機能>

トリアルシステム

ドルイドシステム

絶対守護領域

### 【搭乗者】

シルヴィアⅡ ロックフォード&ハロ

### 【捕捉】

分類的には第一世代型になるが、性能は第三世代機となる。

第一世代型その?

### 【名称】

0<sup>オ</sup>ガンダム

【型式番号】

GN 000

【全高】

18.0 m

【重量】

53.4 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

<sup>GNドライヴ</sup>  
太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

ビームガン×1、ビームサーベル×1、ガンダムシールド×1

<sup>システム</sup>  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

<sup>トランスザム</sup>  
TRANS AMシステム

【搭乗者】

??????????

第二世代型その？

【名称】

アヴァランチエクシア・C カスタム

【型式番号】

GN 001 / h s - A 01 C

【全高】

18・3 m

【重量】

62・1 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1、GNコンデンサー大型粒子貯蔵タンク×1

【武装】

<標準装備>

GNソード×3、GNロングブレード×3、GNショートブレード×1、GNビームサーベル×2  
GNビームダガー×2、GNバルカン×2、GNマイクロミサイル×8

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

GNフィールド

トランザム

TRANS AMシステム

オーバーブースト

【搭乗者】

シルヴィア・ロックフォード&ハロ

第二世代型その？

【名称】

ガンダムエクシア

【型式番号】

GN 001

【全高】

18.3m

【重量】

57.2t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ

太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNソード×2、GNロングブレード×1、GNショートブレード×1、GNビームサーベル×2  
GNビームダガー×2、GNバルカン×2

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

トランザム

TRANS AMシステム

オーバーブースト

【搭乗者】

シルヴィア・ロックフォード&ハロ

第二世代型その？、

【名称】

ガンダムエクシアR<sup>リベア</sup>？

【型式番号】

GN 001RE？

【全高】

18.3m

【重量】

56.9t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】  
GNドライブ「TT」  
擬似太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNソード改×2、GNビームサーベル×2、GNバルカン×2

【特殊機能】  
システム

<標準機能>

生体認証システム

トランザム

TRANS AMシステム

オーバーブースト

【搭乗者】

????????&ハロ

第二世代型その?、?、?

【名称】

GNアーマertype

【型式番号】

GN 001RE?「ガンダムエクシアR?」+GNR 001E  
「GNアームズTYPE E」

【全高】

28.6 m



【全長】

47・4 m

【全幅】

36・2 m

【重量】

161・4 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

<sup>GNドライヴ「T」</sup>  
擬似太陽炉×1、<sup>GNコンデンサー</sup>大型粒子貯蔵タンク×1

【武装】

<標準装備>

大型GNソード×2、GNビームガン×2、大型GNキャノン×2、  
GNソード改×2、GNビームサーベル×2  
GNバルカン×2

【特殊機能】<sup>システム</sup>

<標準機能>

生体認証システム

GNフィールド

<sup>トランザム</sup>

TRANS AMシステム

オーバーブースト

【搭乗者】

????????&ハロ×2

第二世代型その？

【名称】

ガンダムデユナメス

【型式番号】

GN 002

【全高】

18・2 m

【重量】

59・1 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1      GNドライヴ「T」  
擬似太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNスナイパーライフル×2、GNピストル×2、GNビームサーベル×2、GNマイクロミサイル×6  
GNフルシールド

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

トランザム

TRANS AMシステム

【搭乗者】

アリスⅡ ロックフォード&ハロ    ??????Ⅱ ??????&ハロ

第二世代型その？、

【名称】

GNアーマertype D

【型式番号】

GN 002「ガンダムデュナメス」+GNR 001D「GNア  
ームstype D」

【全高】

28.6 m

【全長】

47.0 m

【全幅】

36.9 m

【重量】

164.4 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ「T」  
擬似太陽炉×1、GNコンデンサー大型粒子貯蔵タンク×1

【武装】

<標準装備>

大型ミサイルコンテナ×1、GNツインライフル×1、大型GNキヤノン×2、GNスナイパーライフル×2  
GNピストル×2、GNビームサーベル×2、GNフルシールド

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

GNフィールド

トランザム

TRANS AMシステム

【搭乗者】

?????||?????&八口×2

第二世代型その？

【名称】

ガンダムキュリオス

【型式番号】

GN 003

【全高】

18.9 m

【重量】

54.8 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1      GNドライヴ「T」  
擬似太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNツインビームライフル×2、GNビームサブマシンガン×2、  
GNビームサーベル×2、GNシールド×2

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

トランザム

TRANS AMシステム

テールユニット

【搭乗者】

アリアⅡ ロックフォード      ???????

第二世代型その？

【名称】

ガンダムナドレ

【型式番号】

GN 004

【全高】

18・1m

【重量】

54・0t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

<sup>GNドライヴ</sup>  
太陽炉×1

<sup>GNドライヴ「T」</sup>  
擬似太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNビームライフル×1、GNビームサーベル×2、GNシールド  
×1

<sup>システム</sup>  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

<sup>トランサム</sup>

TRANS AMシステム

トリアルシステム

【搭乗者】

エミリアⅡ ロックフォード ??????

第二世代型その？

【名称】

ガンダムヴァーチエ

【型式番号】

GN 005

【全高】

18.4 m

【重量】

66.7 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ太陽炉×1、GNコンデンサー大型粒子貯蔵タンク×1、GNドライヴ「T」擬似太陽炉×1、GN大型粒子貯蔵タンク×1

【武装】

<標準装備>

GNバズーカ×2、GNキャノン×2、GNビームサーベル×2

【特殊機能】  
システム

<標準機能>

生体認証システム

GNフィールド  
トランザム

TRANS AMシステム

【搭乗者】

エミリア＝ロックフォード　??????

第二世代型その？

【名称】

ガンダムスローネアイン

【型式番号】

GNW 001

【全高】

18.6 m

【重量】

67.1 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNランチャー（GNメガランチャー、GNハイメガランチャー）  
×1、GNビームライフル×1

GNビームサーベル×2、GNシールド×1



システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

トランスザム

TRANS AMシステム

【搭乗者】

????? ? ? ? ? ?

第二世代型その？

【名称】

ガンダムスローネツヴァイ

【型式番号】

GNW 002

【全高】

18・6 m

【重量】

67・1 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ

太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNファンゲ×8、GNハンドガン×2、GNビームサーベル×2、  
GNバスターソード×2

【特殊機能】  
システム

<標準機能>

生体認証システム

トランザム  
TRANS AMシステム

【搭乗者】

????? ? ? ? ? ? ? ?

第二世代型その？

【名称】

ガンダムスローネドライ

【型式番号】

GNW 003

【全高】

19.4 m

【重量】

67.7 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNハンドガン×1、GNビームサーベル×2、GNシールド×1、  
GNシールドポッド×1

【特殊機能】  
システム

<標準機能>

生体認証システム

トランザム

TRANS AMシステム

GNステルスフィールド

【搭乗者】

????? ? ? ? ?

第三世代型その？

【名称】

ケルデイルガンダムGNHW/R

【型式番号】

GN 006GNHW/R

【全高】

18.0m

【重量】

58.9 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNスナイパーライフル？×2、GNピストル？×4、GNマイク

ロミサイル×4、GNシールドビット×18

GNライフルビット×12

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

トランザム  
TRANS AMシステム

【搭乗者】

アリスⅡ ロックフォード&ハロ

第三世代型その？

【名称】

アリオスガンダムGNHW/M

【型式番号】

GN 007GNHW/M

【全高】

19・1m

【重量】

55・4t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNキャノン×2、GNミサイルコンテナ×2、GNビームライフル×1、GNビームサーベル×2

GNサブマシンガン×2、GNバルカン×4、GNビームシールド

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

トランザム  
TRANS AMシステム

【搭乗者】

アリア・ロックフォード

第三世代型その？

【名称】

セラヴィーガンダムGNHW/B

【型式番号】

GN 008GNHW/B

【全高】

18・2m

【重量】

67・2t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

<sup>GNドライヴ</sup>太陽炉×1、<sup>GNコンデンサー</sup>大型粒子貯蔵タンク×1

【武装】

<標準装備>

GNダブルバズーカ（GNバズーカ？×4）×2、GNキャノン×6、GNビームサーベル×6

【特殊機能】<sup>システム</sup>

<標準機能>

生体認証システム

GNフィールド<sup>トランザム</sup>

TRANS AMシステム

【搭乗者】

エミリア＝ロックフォード

第三世代型その？

【名称】

セラフィムガンダムGNHW/B

【型式番号】

GN 009GNHW/B

【全高】

16.6m

【重量】

27.4t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNドライヴ  
太陽炉×1

【武装】

<標準装備>

GNキャノン×4、GNビームサーベル×2

【特殊機能】  
システム

<標準機能>

生体認証システム

トランザム

TRANS AMシステム

トライアルフィールド

【搭乗者】

エミリアⅡ ロックフォード



## ロックフォード製MS支援機設定（種期）

第一世代

### 【名称】

ザンライザー（ザンユニット装備型オーライザー）

### 【型式番号】

GNR 010/XN「ザンライザー」

### 【全高】

9・8 m

### 【全長】

26・1 m

### 【全幅】

16・2 m

### 【重量】

40・3 t

### 【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

### 【動力源】

GNコンデンサー  
大型粒子貯蔵タンク×1

### 【武装】

<標準装備>

GNバスターソード? × 2、GNバルカン × 4、GNビームマシンガン × 2、GNマイクロミサイル × 8

<追加装備>

GNシールドビット × 18、GNライフルビット × 6、GNファン  
グ × 10

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

ライザー  
RAISERシステム

<追加機能>

トリアルシステム

【搭乗者】

ハ口

【捕捉】

分類的には第一世代型になるが、性能は第三世代機となる。

第二世代型その?

【名称】

GNアームズTYPE E

【型式番号】

GNR 001E

【全高】

1 5 ・ 3 m

【全長】

4 7 ・ 4 m

【全幅】

3 6 ・ 2 m

【重量】

1 0 4 ・ 2 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GNコンデンサー  
大型粒子貯蔵タンク×1

【武装】

<標準装備>

大型GNソード×2、GNビームガン×2、大型GNキャノン×2

【特殊機能】  
システム

<標準機能>

生体認証システム

【搭乗者】

八口

第二世代型その2

【名称】

G N アームス T Y P E D

【型式番号】

G N R 0 0 1 D

【全高】

1 5 . 3 m

【全長】

4 7 . 0 m

【全幅】

3 6 . 9 m

【重量】

1 0 5 . 1 t

【装甲材質】

Eカーボン（G N 粒子コーティング仕様）

【動力源】

大型粒子貯蔵タンク×1  
G N コンデンサー

【武装】

< 標準装備 >

大型ミサイルコンテナ×1、G N ツインライフル×1、大型G N キヤノン×2

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

【搭乗者】

八口

第三世代型

【名称】

GN<sup>ガン</sup>アーチャー

【型式番号】

GNR 101A

【全長】

25.8 m（飛行形態時）

【全幅】

11.6 m（飛行形態時）

【重量】

30.8 t

【装甲材質】

Eカーボン（GN粒子コーティング仕様）

【動力源】

GN<sup>ガン</sup>コンデンサー  
大型粒子貯蔵タンク×1

【武装】

<標準装備>

G Nビームライフル×2、G Nバルカン×2、G Nミサイル×8、  
G Nビームサーベル×2

システム  
【特殊機能】

<標準機能>

生体認証システム

【搭乗者】

マリア・ロックフォード

## プロローグ 「不幸な出来事…」

「side ???」

いつの間にか、私は真つ白な空間にいた。立っているのか、浮いているのか……、それとも沈んでいるのか……。よく分からない空間に私はいる。

私の記憶が正しければ、私は高校から帰宅している途中の筈。……よく思い出してみよう。

……… 帰り道の橋の所で突風が吹いたのを覚えている。体が吹き飛ばされそうな突風。私は飛ばされない様に橋の手摺に捕まって、必死に耐えてた。

……… あっ！！その後、どこからか看板が飛んできて、私にぶつかったんだ。そして、体勢を崩した私は風の勢いもあって橋から

「まあ、概ねその通りだ」

私が自分が死んだことを認識して愕然としてみると、誰かに話しかけられた。話しかけられた方に顔を向けると、頭に輪っかのある男が立っていた。

「あなた、誰ですか？」

何ものか分からない眼の前の男に警戒しながら、私は尋ねた。ちなみに、どうでもいい情報だけど、私は他人と話をする時、敬語になっってしまう癖がある。

「俺は君達、人間風に言うなら神様と言った存在だ」

死んだ私の前に神様が現れた。もしかして、あの世に連れて行かれるかな？そんなことを思っていると、神様が頭を下げてきた。

「すまなかった」

「えっ？」

神様の謝罪に私はそう口にすることしかできなかった。そんな私に神様は頭を下げたまま口を開いた。

「君が死んだのは俺のせいだ」

「……………どういうことですか？」

神様の話によると、私達の世界はジオラマの様な形で神様の部屋に



飾られてるらしい。しかも、町や村単位で管理されてみたい。

神様も1人だけじゃなくていっぱいいるみたいで、その全員で私達の世界を管理してるみたい。

雨を降らせる時は如雨露に水を入れて流し、風が必要な時は団扇で扇ぐんだって。台風の時とかは扇風機を使うみたい。

で、何で私が死んだ理由がこの神様のせいになるかというと、私が丁度橋にいた時に、この神様がピンポイントで橋の所に大きなくしやみをしてしまったらしい。

つまり、私はこの神様のくしやみで殺されたらしい。そして、本来死ぬべきではない私を殺してしまった罪滅ぼしに、私を別の世界で復活させてくれるらしい。

正確には、身体は健康だけど、何らかの理由で精神が完全に死んでしまった人間に憑依させてくれるとのこと。

しかも、行ける世界をチョイスできる上、それが漫画やアニメの世界でもOKらしい。まあ、そんな訳で私はガンダムSEEDの世界に行くことにした。

SEED世界での私の名前はシルヴィア・ロックフォードと言いたい。容姿はSEEDの世界なのに何故か00の女装版ティエリアだった。

何でも、アイルランドで有名な大企業の令嬢らしいのだけど、ブルースモスのテロに巻き込まれて、両親が目の前で死んでしまい、精神が壊れてしまったらしい。

何とも微妙な位置付けだ……。そんなことを思っていると、神様は謝罪も兼ねて、スーパーコーディネーターの力とSEED覚醒、イノベーターの力。更に私専用のガンダムとして？ダブルオーザンライザー<sup>セブンスード</sup>7S/G？を与えてくれると言ってくれた。

？ダブルオーザンライザー7S/G？は、私が住んでいる屋敷の地下格納庫にあるらしい。……ってか、何で屋敷の地下に格納庫があるんだろ？

取り敢えず、神様はもう一度私に謝罪をしてから、原作開始7年前に送ると告げ、私の前から消えた。そして、神様が私の前から消えると同時に、私は眩い光に包まれた。

「side out」

## 第1話 「偽りの平和」

「side シルヴィ」

えっと……。私がSEEDの世界に来てから色々あったけど、7年の月日が流れた。

本当にこの7年間で色々ありましたよ。死別した父様の会社を継いだり、私と同じブルークスモスのテロで家族を失った女の子達を4人程妹にしたり、オーブに移住したりもした。

あと、オーブ移住後に会社を財団に発展させたり、財団が世界的な影響力を持つ存在になったお陰で命が狙われるのもある意味日常茶飯事になってしまったりと……。本当に大変だった。

あつ、命が狙われるようになってから、私が着ている服の至る所に投げナイフや小型銃、小型手榴弾などを仕込む様になった。今の私はある意味暗器使いだ。

しかも、スーパーコーディネーター並みなのは頭とソフト技術面だけかと思いきや、身体能力も該当してたみたい。。

今では射撃はロックオン。白兵戦は刹那以上の戦闘技術を持っていると自負している。

あつ、言い忘れていましたが、私はこの世界での両親の記憶があります。どうやら、人格統合は無くても、記憶の共有はあったみたいです。

だから、この世界での父様と母様を殺したブルーコスモスを憎んでいて、ブルーコスモスのパシリである連合軍を嫌悪していたりします。

さて、そんな大変な思いをした私が現在どこにいるかと言うと、ヘリオポリス？に来ている。

妹達や社員さん達に働き過ぎだから骨休めも兼ねて行って来いと言われて来たんだ。しかし、時期が悪過ぎ。

携帯の日付を見ると、今日はC・E・71年1月25日と表示されている。なんと、ヘリオポリス？の崩壊する日ではないか！！

？ヘリオポリス？に行けと言われた時に、いやな予感がしてたんだ。念の為に？アヴァランチエクシア・C？カスタムをシャトルに積んで来たのが不幸中の幸いだ。？

でも、本音を言うなら？アヴァランチエクシア・C？カスタムより本来の愛機である？ダブルオーザンライザー7S/G？セブンソードを持って来たかった。

何故、？ダブルオーザンライザー7S/G？セブンソードを持って来なかったかと言うと、妹達に財団にとって切り札みたいなものだから駄目だと言われたのだ。

ま、実際は私以外？ダブルオーザンライザー7S/G？セブンソードを解析でき

ていないので、私のいない間に解析したいただけかもしれないけど。

ちなみに？ダブルオーザンライザーセブンソード7S/G？には生体認証システムが搭載されていて、当初は私以外の人間が搭乗したりしたら自爆する様に設定されていた。

現在は私がその設定を書き換え、妹達なら搭乗しても大丈夫なようにしたので特に心配はないと思う。

あつ、あと？アヴァランチエクシア・C？のカスタムカスタムが気になる人がいると思うので説明します。このカスタムは文字通りオリジナルの？アヴァランチエクシア？を改造しているという意味です。

どこら辺が改造されているかと言うと、見た目は？アヴァランチエクシア？なんです、外部装甲に？デユナメス？の様にGNミサイルを仕込んでる所があったりするんです。

その辺りがカスタムの所以です。ちなみにこの？アヴァランチエクシア？は神から貰ったものではなく、自作です。

？ダブルオーザンライザーセブンソード7S/G？のデータと私の頭脳を駆使して完成させました。

しかも、シャトルの入港も？モルゲンレーテ？に潜んでいる財団の地下協力員のお陰で？モルゲンレーテ？の港に入港でき、？アヴァランチエクシア・C？カスタムを？モルゲンレーテ？の工場区にある隠し格納庫に置くことができた。

ちなみに、この隠し格納庫の真上には搬出直前の？ストライク？と？イージス？が置かれているらしい。

取り敢えず、私は？モルゲンレーテ？行き来できるIDカードを貰うと、隠し通路から外へと出て行った。

ちなみにIDは本物と言えど本物であり、偽造と言えど偽造である。どいう意味かと言うと、このIDは？モルゲンレーテ？の職員である地下協力員が、？モルゲンレーテ？内で製作したものであり、他の職員が所有しているものと全く同じなので本物と言っても間違いはないのである。

しかし、実際に私は？モルゲンレーテ？の職員と言うわけではないので、私が職員であるということに関しては嘘なのだ。

まあ、そんなことははっきり言っただうでもいい。取り敢えず、？ヘリオポリス？が崩壊するまでの間に、少しでも骨休めをすることにしよう。

そんなことを思いながら、私は旅行鞆を片手にエレカなどを利用して移動を始めた。

基本的にする行動は食べ歩きで、お腹が一杯になった所で軽く散歩する様に歩いていると、気が付いたら工業カレッジに来ていた。

もしかしたら、キラに会えるかな？そんなことを考えていると、聞き覚えのある鳴き声が聞こえてきた。

トリイ

鳴き声の聞こえた方を向くと、キラ＝ヤマトのロボット鳥であるトリイが飛んで来て、トリイは羽を休めるかの様に私の肩に止まった。 “トリイがここにいるってことは、近くにキラがいるのかな？” と思っていると、トリイが飛んで来た方向から男の子の声が聞こえてきた。

「トリイ〜！」

声がした方を向くと、SEEDの主人公・キラ＝ヤマトがいた。私がキラのことを凝視していると、キラは私の肩にいるトリイの存在に気付いて、声を掛けてきた。

「ごめん……。その鳥、僕のなんだ」

「そうなんですか？ 可愛いロボット鳥ですね」

「え？ あっ……、うん」

「この鳥、返しますね」

私はそう言つて、トリイをキラに返そうとしたんだけど、トリイは私から離れようとしてくれなかった。

「……………？ あれ？」

肩の方に指を近付けると、トリイは指に飛び移ってくれるんだけど、

その指をキラに近付けると、再び私の肩に飛び移ってしまう。その行動を何回も繰り返していると、キラが少し笑ってから口を開いた。

「ははは……。無理に返そうとしなくてもいいよ」

「え……。何ですか？」

「なんか、懐いちゃってるみたいだし……」

キラにそう言われてトリイの方を見ると、トリイは可愛らしく首をかしげながら鳴いた。私を萌え殺す気ですか。トリイ？

「君のこと、気に入ったみたいだ」

「え……」

「トリイは僕以外に懐くことが滅多にないから分かるんだ」

「そうなんですか。……。あつ！自己紹介がまだでしたね。私はシルヴィア。シルヴィア〓ロックフォードって言います」

私はトリイのことで頭がいっぱいになって、自己紹介をするのを忘れていたことを思い出した。キラのことは知ってるけど、一方的だから自己紹介はやっぱり必要だと思う。

「そう言えば、そうだね。僕はキラ、キラ〓ヤマトって言っただ」

「えっと……。ヤマトさんと呼んだ方がいいですか？」

「えっ！？そ、そんな呼び方じゃなくて、普通にキラでいいよ。それにもっと砕けた話し方でいいから」

「そうですか？それでは……。キラって呼ばせてもらいますね。私



のことはシルヴィと呼んで下さい。話し方ですが…、敬語で話すのは癖なので、お気になさらないで下さい」

私とキラは互いにそう言い終えると笑った。笑っていると、キラが持っているものが眼に入ってきた。それはノートパソコンだ。

「あ のっ…。もしかして、キラは仕事の途中だったのでは……？」

私がノートパソコンを凝視しながらそう言つと、キラは苦笑しながら答えてくれた。

「あ、うん。似た様なものかな？ やってる途中でトリイがどっかに行っちゃって……。もし良かったら、暫くトリイを見ててくれないかな？」

「はい。それにしても……。驚きました」

「えっ、何が？」

「仕事ということは、キラは社会人なんですね。私と同じ16歳位ですから、てっきり学生さんかと思っただんですが……」

私はキラにそう言いながら一緒に近くにあるテーブル付きのベンチに腰を掛けた。

「僕は工業カレッジの学生だよ。この仕事はカレッジの教授に押し付けられたんだ」

キラはそう言いながらテーブルにノートパソコンを置いて開くと、片手に紙の束を持ちながら、少し嫌そうな顔をしながら作業を始めた。

「……そう言えば、シルヴィはどこかのカレッジの学生？」

私がトリイに構つてると、キラが作業をしながら聞いてきた。

「いいえ。私は元々本土にいましたから……。私の家はある意味自営業でして……。骨休めで？ヘリオポリス？に来たです」

「シルヴィはもう働いてるの？」

「ええ。ある意味そうですね。でも、何故いきなりその様なことお聞きに？」

「えっと、あまり見掛けたことがなかったから……」

「成程。納得です」

私がそう言い終えると会話が終了してしまった。会話のネタが思い浮かばなかった私は、再びトリイを構い始めた。そして、暫くするとキラが唸り声を上げ始めた。

「うーん……」

「どうされたのですか？」

私がそう尋ねると、キラはこっちを向いて答えてくれた。

「ちょっと分からない所があつて……」

「少し見せて貰えますか？」

「いいよ」

キラにパソコンの画面を見せて貰った私は、そこに映し出されてるプログラムの内容を把握し、キラに尋ねた。

「分からない所とは、ここですか？」

「うん、そう」

「ここはこうじゃないですか？」

私はそう言いながら、キラ以上の速さでキーボードを叩いた。隣でそれを見ているキラはすごく驚いてる。

「キラ？終わりましたよ？」

「あ、ありがとう」

キラはお礼を言うと私の作ったプログラムを見て更に驚いていた。そして、キラは私の方を見ると口を開いた。

「シルヴィって、コーディネーター？」

キラの質問に私は即答した。

「いいえ。私はナチュラルですよ」

「え!？」

キラからは予想通りの反応が返ってきた。

「私の家は自営業なんです、プログラミング関係の仕事もしているの……。だから、自然とこういうことができる様になったです。先程も？ヘリオポリス？には骨休めで来たと言いましたが、プログラミングが得意と言うこともあり、来週の頭から3日程？モルゲンレーテ？でプログラミングの手伝いすることが決まっています、とても休みに来たという気持ちにはなれませんけど」

「そうなんだ……」

「……………そう言えば、キラはナチュラルとコーディネーターのどちらなんですか？」

一応、私もキラに聞いておくことにした。本当はコーディネーターだって知ってるけど、本人の口から聞きたかったから……。

「僕は……………、コーディネーターだよ」

「そうなんですか」

私はキラが自分から正直に答えてくれたことが嬉しくて、微笑みながら返答した。そんな私にキラは何でか驚いていた。

「……驚かないの？」

「何がですか？」

「その……、僕がコーディネーターってことに……」

「キラはキラではありませんか？ ナチュラルか、コーディネーターか？」なんて質問、“欧米圏か、アジア圏か？”と出身の質問をしているのと大して変わらないと思いますよ。

私は人種差別というものが嫌いですし……、それに人種とその人の本質とは関係ないと思います。

私はただ、キラが私にコーディネーターか聞いてきたので、私も聞いた方がいいのかと思って聞いただけです」

私がそう言い終えると、キラは何故か呆然としながら私を見ていた。普通なら、そんなに見られると恥ずかしいんだけど、今は微妙な空気の様な気がして、恥ずかしくはなかった。

私達がそのままの状態していると、少し離れた所から声が聞こえてきた。

「キラー！」

「side out」

「side キラ」

「キラはキラではありませんか？ “ナチュラルか、コーディネーターか？”なんて質問、“欧米圏か、アジア圏か？”と出身の質問をしてるのと大して変わらないと思いますよ。

私は人種差別とか嫌いですし……。それに人種とその人の本質とは関係ないと思います」

僕は出会ってから1時間も経っていないシルヴィにそう言われて、衝撃を受けた。

シルヴィが言った様に、“キラはキラだ”って言うってくれる友達がいる。だけど、それは仲が良くなってから僕がコーディネーター知った人達で、初対面でまだ友達とも言えない人にそんなことを言われたことがなかったからだ。

パソコンから華南のニュースが流れる中、そんなことを思いながらシルヴィを見ていると、声が聞こえてきた。

「キラー！」

少し離れた所から誰かが僕の呼んだから、そっちの方を見るとちら

ヘツールとミリアリアがいた。

「こんなトコにいたのかよ。カトウ教授がお前のこと、捜してたぜ」

「またあゝ？」

シルヴィに気付いていないのか、そう言ってきたツールに僕は溜息をついた。また、新しい仕事の手伝い……、って言うか、仕事そのものを押しつけられるみたいだ。

「見掛けたら、すぐ引つ張って来いってさ」

「なーに？また手伝わされてるの？」

ツールの隣にいるミリアリアが小さく笑いながら僕に尋ねてきた。

「昨日渡されたのも、ようやく終わったばかりなのに……」

僕はそう言つとさっきより深い溜息を吐いた。

「……キラ。隣の人って、誰？もしかして、彼女？」

ツールと会話していると、ミリアリアがシルヴィに気付いた様で尋ね

てきた。

「ち、違つよ！シルヴィとはさっき知り合つて、教授の仕事を手伝つてもらつて……」

「ほほおー。呼び捨てして、仕事を手伝つて貰う関係ですか。キラ  
「ヤマト君？」

「ト、トール……」

僕がミリアリアがシルヴィのことを彼女と言つたことに反応し、弁解すると、今度はトールが冷やかしてきた。  
その状況に困っていると、シルヴィアが助け船を出してくれた。

「あの……。キラの言つてゐることは本当ですよ。私達はさっき知り合つたばかりなんです。私、本土から来たばかりで、？ヘリオポリス？のことは詳しくなくて……」。

あつー！そう言えば、自己紹介がまだでしたね。私はシルヴィア。  
シルヴィア「ロックフォードって言います。シルヴィは愛称なんです。良かったら、愛称で呼んで下さい」

シルヴィが柔らかい笑みを浮かべながら自己紹介をすると、シルヴィの微笑に見とれていたミリアリアとトールも自己紹介を始めた。

「は、はじめまして。私はミリアリア「ハウ。ミリイって呼んでね  
！」

「お、オレはトール「ケーニヒ。トールでいいよ」



まあ、あんな微笑を向けられたら<sup>ども</sup>吃るのも分かるけどさ……。何で  
トールはトマトみたいに顔を赤面させてるの？トールにはミリアリ  
アって彼女がいるよね？

そんなことを思っていると、トールが話題を変えるみたいに話し掛  
けてきた。

「お？何か新しいニュースか？」

トールがシルヴィを横目で見ながら僕の隣に来てパソコンの画面を  
見た。

「ああ…、<sup>カオシユン</sup>華南だつて」

画面にはビル等の建物は殆ど壊れていて、必死に逃げ惑う人々が映  
っていた。

「ひええ…。先週でこれじゃ、今頃落ちちゃってるんじゃないの？  
華南」

そう言ってきたトールに僕は苦笑いをしてパソコンを閉じた。

「華南なんて結構近いじゃない？大丈夫かなあ、本土……」

「ああ、それは心配ないでしょ。近いつたってウチは中立だぜ？オ  
ーブが戦場になるなんてことはまずないって」

ミリアリアの不安な声にツールが気軽に答えた。僕はミリアリアと  
同じ様にシルヴィも不安になってるんじゃないかと思い、隣にいる  
彼女に目をやると、彼女は少し眉を寄せていた。

「……シルヴィ、どうかしたの？」

「……えっ？」

「何かやりきれないって顔してたから……」

「あ……、はい。軍人同士が戦争で殺し合うのは勝手ですが、巻き  
込まれる民間人は堪ったものじゃないと思ひまして……」。

軍人が不甲斐ないから、いつも民間人が巻き込まれて被害者になる。  
だから、憎しみが増えて戦争の輪が広がる。

戦争がしたいと言うなら、したい者同士で私達の世界の外で関係な  
い人を巻き込まずに勝手にするべきです……」

シルヴィはそう言うと、いつの間にか肩から飛び立ち上空で旋回し  
ていたトリイへと悲しみに満ちた目を向けた。

「そう……だね。関係ない人間を巻き込み権利なんて誰にもない」

「……ええ」

僕はシルヴィの言ってることに共感できたから同意して、自分の意見を口にした。すると、シルヴィは額の力を抜いて答えてくれた。

そして、シルヴィと話を終え、僕が上空で旋回しているトリイをぼーっと見ていると、急にトールに話し掛けられた。

「キラ？」

「う、わあぁっ!？」

僕はヌツと出てきた、トールに驚いて飛び退いた。

「何やってんだ…、お前？」

「び、びっくりした……」

トールが呆れ気味にそう言つと、その横にいるミリアリアは小さく笑った。そして、僕はシルヴィの方を見ながら口を開いた。

「そ、そう言えば……。シルヴィはどうするの？」

「え？」

突然の僕の問いにシルヴィは何のことか分からない顔をしていた。

「僕達はこれからゼミの研究室がある？モルゲンレーテ？に行くん

だけど……、良かったら一緒に来ない？来週から？モルゲンレーテ？でプログラミングの仕事をしたら尚更だと思っし……」

「……でも、いいのでしょうか？確かに？モルゲンレーテ？のIDは持っているんですが、現時点では部外者ですし……。それに荷物持つてますし……」

「見学に来たつてことにすれば大丈夫なんじゃねーの？つてか、シルヴィって？モルゲンレーテ？の職員なの？」

僕がシルヴィと一緒に来ないか誘ってみると、シルヴィは遠慮気味に聞いてきた。すると、ツールが僕の誘いを後押しする様に言ってくれと同時に、シルヴィのことを詳しくないので尋ねてきた。

「本土にあるシルヴィの実家はプログラミング系の自営業をやってるんだつて。それでシルヴィ自身、プログラミングが得意つてこともあつて、来週の頭から3日程？モルゲンレーテ？でプログラミングの手伝いをするのが決まってるんだつて」

「へえ……。なら、尚更来るべきだつて。初日に行つて、迷ったりしたらシャレになんないだろ？」

「……では、行つてみましょう」

ツールの後押しもあつてか、シルヴィも一緒に？モルゲンレーテ？へ行くことになった。そして、僕達はレンタルエレカポートへと向かった。

「side out」

「side シルヴィ」

元々、？アヴァランチエクシア・Cカスタムが？ストライク？と？イージス？のある工場区の格納庫下にあるので、？モルゲンレーテ？には隠し通路を使って侵入しなきゃいけないと思っていたから、キラ達の誘いは渡りに船だった。

こうして、私はキラ達と一緒に？モルゲンレーテ？へと向かうことになった。？モルゲンレーテ？に向かうエレカが駐車してあるレンタルエレカポートへと行くと華やいだ嬌声が聞こえてきた。

「だからあ、そう言うんじゃないんだってばーっ！」  
「うっそぉ」

エレカポートの前で女の子達が騒いでいた。その内の一人はフレイ「アルスターだ。正直言つて、私は彼女が好きではない。」

“何処が？”と聞かれても困るけど、どうしても好きになれない。もしかしたら、生理的に拒絶しているのかもしれない。

私がそんなことを考えている内も話は続いていて、取り敢えず、私は考えていることを顔に出さない様にしている。

「あ、ね？ミリアリアなら知ってるんじゃない？」  
「？」

フレイの友人その1（笑）っぽい子がミリイにそう言うと、ミリイは何のことか分からず首を傾げた。……もう、ミリイってば……。今の仕草は反則だよ。可愛過ぎ！！

「やめてってば！もう！」

「この子ったら、サイアーガイルに手紙貰ったの」  
「えっっ？」

嫌がるフレイを無視して、フレイの友人その1（笑）がミリイにそう言うと、ミリイは素っ頓狂な声を上げ、後ろにいたキラも声には出さなかったが驚いていた。そして、フレイの友人その1（笑）は話を続ける。

「なのに、何でもないって話してくれないのよー」  
「あんた達、もういい加減に……！」

ほんのり頬を赤くしてフレイが手を上げると私の後ろから女性の声が聞こえた

「んん！乗らないのなら先によろしい？」

サングラスを掛けた女性……、ナタルⅡバジールが尋ねてきた。  
ナタルの後ろにはアーノルドⅡノイマンとジャッキーⅡトムラが  
いた。私は無言で道を譲り、トールも口を開いて道を空けた。

「ああ、すみません。どうぞ」

ナタル達が真ん中を通り抜けエレカに乗って行ったのを確認すると、  
フレイは次のエレカを捕まえた。

「もう知らないから！行くわよ！」

「ああっ！待ってよお」

慌てて女の子達も乗り込むとそのままエレカは行ってしまった

「意外だな、サイⅡアーガイルとは……。ま、今の君には関係ない  
か、キラ・ヤマト君？」

「ど、どういう意味だよ。トール」

「そのまんまだよ」

トールが何か意味を含んだ様に言うと、何故かキラは過剰に反応し  
ながら私の方をチラっとだけ見てからエレカへと乗り込んだ。

「シルヴィ、行くよ？」  
「あ、はい」

ツールとキラがエレカに乗りこんだ後、少しだけぼーっとしてた私はミリイの声に反応してエレカに乗り込んで、？モルゲンレーテ？へと向かった。

……そして、色々とすっ飛ばして、今は？モルゲンレーテ？にいます。もうすぐカトウゼミのラボに着く所です。

？モルゲンレーテ？に入る時はIDを持っていたこともあり、すんなりと入ることができた。

つと、そんなことを考えている内にラボに着いちゃった。私はキラ達の後について中に入った。

「うーっす」  
「あ、キラ。やっと来たか」

キラ達と部屋に入ると、中にはサイ「アーガイルとカズイ」バスカーク。そして、男装（？）したカガリ「ユラ」アスハがいた。

「誰？」

カガリの存在に気付いたツールがカズイに小声で聞いた。



「ああ、教授のお客さん。ここで待ってるって言われたんだと」  
「ふん」

「サイ、教授は？」

「これ預かってる。追加とかって」

「うえ」

キラはあまり興味がない様でサイに教授のことを尋ねた。そして、サイから返された言葉に嫌な顔をした。

「何なんだ？ どうせ？ モルゲンレーテ？ の仕事の方なんだろうけど」

「興味ないよ。フレーム設置とモジュールの改良。とにかくプログラムの解析さ」

「そっか」

サイは自分が渡したメディアが気になった様でキラに尋ねた。すると、キラは興味なさ気にメディアを見ながら答え、サイは？ 御愁傷様？ と言った感じで言葉を返した。

キラとサイがそんな遣り取りをしていると、ツールがキラの後ろに回りこんで肩に腕を回しながら口を開いた。

「そんなことより、手紙のこと聞こうぜっ！」

「手紙？」

トールの言ったことが理解できないのかサイは首を傾げながら言った。

「な、何でもないから！気にしないで！！」

「何でもなくねーだろっ！」

まあ、そんな感じで皆はじゃれ合っている。そして、その平和そうな様子をカガリはじーっと見詰めていた。

私は壁に背を預けながらその様子を眺めているんだけど、その場の空気がとても心地良かったので、自然と顔が緩み、軽く笑った。

「そう言えば、あの子は誰なんだ？」

私が様子を見てみると、私に気付いたサイがキラに小声で尋ねた。

「ああ、彼女はシルヴィア・ロックフォード。本土にいたんだけど、ヘリオポリス？には仕事の骨休めに来たんだって。プログラミンが凄く上手かったから、ゼミに誘ってみたんだ」

「へー。あの子、もう仕事してるのか？」

「何でも、プログラミング系の自営業なんだって」

「ふーん。綺麗な子だね」

キラ達の会話は私に普通に聞こえていた。小声で話してるんだけど、それでも聞こえてくる。どうやら、聴覚までスーパースーパーディーネー

タのようだ。もしかしたら、絶対音感とかも持つてるかも知れない。そんなことより、カズイは何てことを素で言ってるんだろう。恥ずかしいのだろうか？

そんなことを考えてると、突然凄まじい揺れが起こって私は倒れそうになった。けど、倒れることはなかった。いつの間にか後ろにいたキラが支えられてくれたからだ。

「大丈夫？」

「え……？あつ、はい！ありがとうございます……」

身体を支える為とは言え、キラに触れたことで私は顔が熱くなった。一方、キラの方と言うと、全くと言っていい程気にしていない感じだった。

「隕石か！？」

サイの言葉を聞き、全員が慌てて部屋を出てエレベーターへ向かった。しかし、揺れは治まる気配すらなく、エレベーターも揺れの影響で電圧が不安定になっていた為、停まっていた。

エレベーターが使えない為、仕方なく非常階段へ行くと、丁度上がってきた職員がいた為、サイが現在の状況を尋ねた。すると

「ZAF<sup>ザフト</sup>Tに攻撃されてる！コロニーにMS<sup>モビルスーツ</sup>が入って来てるんだよ！」

その言葉に私とキラの隣にいたカガリが突然どこかに走り出してしまった。行先は？ストライク？と？イージス？がある工場区の格納庫だろう。

「君！」

非常階段とは逆方向に駆けて行くカガリをキラが追い掛けようとしている。

「キラ！？！」

「すぐ行くから！」

トールが驚いてキラを見たけど、キラは止まることなく走り去って行った。そして、私も荷物を持ったままキラの後を追う。

「シルヴィー！？！」

「すみません！先に行つて下さい！」

私はミリイの呼ぶ声に答えると、キラとカガリの後を追い掛けた。キラとカガリには意外と早く追い付き、既に2人は私の目と鼻の先にいる。私はすぐ前を走っているキラに声を掛けた。

「キラっ！」

「シルヴィー！？何で！！？」

「2人だけを放っては置けません！」

私がそう言い終えてキラと並走し、漸くカガリに追いついて、キラがその腕を掴むと、今度は揺れだけでなく爆発が起こった。

「2人とも伏せて下さい！！」

私はそう叫ぶと同時にキラとカガリを押し倒し、私達に向かってくる爆風から身を守った。ちなみに、押し倒した拍子にカガリの帽子は取れて、カガリの顔を見たキラは霊の言葉を口にした。

「女…、の子？」

そう呟いたキラにカガリは鋭い目で睨み付けた。

「何だと思ってたんだ、今まで！」

「いや、だって……」

普通なら感動の対面であるべき行き分かれた双子の姉弟の再開が、こんなシュールなものだと誰が想像しただろうか……。何だか気まずい雰囲気の中で私は小さく溜息を吐いた。

「いいから行け！私には確かめねばならぬことがある！」

尚も小さな爆発が続く中、カガリは立ち上がり、奥に向かおうとしながらもキラと私にそう告げた。しかし

「どう考えても戻れませんね」

来た道は既に瓦礫で塞がれていて、私はそれを見ながらカガリに告げた。

「ええと…。ほら、こっち！」

キラは私とカガリの腕を掴むと、引つ張りながら走り出した。

「離せ！このバカ！」

「ばっ…！」

腕を引つ張るキラにカガリは暴言を吐き、その発言にキラは少しむっとなったのか、カガリの顔を見ていた。すると、カガリの顔には少し目尻に涙が滲んでいた。

「こんなことになってはと私は……」

「だ、大丈夫だって。助かるから！工場区に行けばまだ退避シエルターが」

私とキラ、カガリは通路を辿って走り、ついに？ストライク？と？イージス？のある格納庫へと出た。

キャットウォークの上で私達がシエルターの方へ歩き出そうとする  
と、廊下から銃声が鳴り響き、私は銃声の聞こえた方へと顔を向け、  
キラは首を竦めた。

そして、キラは階下で銃撃戦が行われている中、視界に入ってきた  
もののせいで足を止めた。

「こ、これって……」

「ああ、やつぱり……。地球軍の新型機動兵器……。くっ、お父様の裏  
切り者っー！！」

カガリがそう叫ぶと同時に跳弾して、カガリの方に向かってくる弾  
丸に気付いた私はカガリを自分の所に引き寄せた。

「っ！冗談じゃない！」

そして、キラは銃撃戦に巻き込まれそんな現状に悪態をつきながら、

カガリと私の腕を引っ張り、再び走り始めた。

そして、退避シェルターの入り口へと辿り着き、インターフォンを押すとスピーカーから応答の声が聞こえた。

< まだ誰かいるのか？ >

「はい！僕と友達もお願いします。開けて下さい」

< 2人！？ >

「いえ。3人です」

キラの返答に数瞬の沈黙が流れた。

< もうここは一杯だ。左ブロックに37シェルターがある。其処まで行けんか？ >

キラは左ブロックを見て、何かを考えている。それを見た私は、ここでシェルターに入ったら？アヴァランチエクシア・C？<sup>カスタム</sup>がジャンク屋に渡る可能性があると考え、インターフォンに向かって叫んだ。

「でしたら、女の子一人でもお願いできませんか？」

「シルヴィー！？」

キラが声を荒げたが、この際無視。また少し沈黙が流れると受け答えしてくれてる人が返答してくれた。



<分かった。済まん！>

ロックを示すランプが赤から青へ変わり、扉が開いたので、私は力ガリを中へと押し込んだ。

「何！お前達は……！？」

「平気！向こうのシエルターに行くから早く乗って！」

いつまでも中へ入ろうとしないカガリを無理やり押し込んでシエルターを閉めると、カガリがガラス越しで何かを叫んだが、下層のシエルターへと送られて行った。

私とキラはそれを見送った後、少しだけ顔を合わせると言葉を交わすこともなく頷き、もう1つのシエルターへと向かって走り出そうとした。

その時、また爆発が起こり、その影響で大きな揺れが発生し、何故かピンポイントに私の足元が崩れ落ちた。

「きゃあ！？」

「シルヴィー！？」

キラは咄嗟に手を伸ばそうとしてくれたが、それも届かず、私はそ

のまま落ちていった。

私の落ちた穴は何故かダスト状になっていた様で、それが途中から滑り台風に変化し、私はそれをひたすら滑り続けている。

そして、漸く出口へと着いた様で、勢いもあつたせいで放り出され、臀部を強く打ちつけた。

「いたたたた……」

私はそう言つて強く打ちつけたお尻を摩りながら顔を上げると、そこには？アヴァランチエクシア・C？カスタムがあつた。

どうやら、あの穴は？アヴァランチエクシア・C？カスタムの隠し格納庫への隠し通路に繋がっていた様だ。

「ガロードだったら、“俺、神様信じる！”と言つのでしょつか？」

私は答えてくれる人がいないと分かつていながらそう言つと、いそいそと？アヴァランチエクシア・C？カスタムへと乗り込んだ。

鞆をシートの後ろに置き、操縦桿を握ると生体認証システムが起動した。

「いきますよ、？アヴァランチエクシア？。これが私達の初陣です」

私はそう言つと暗い隠し格納庫の中で？アヴァランチエクシア・C<sup>カスタム</sup>  
？を起動させた。

「side out」

## 第2話 「その名はガンダム……」

「side シルヴィ」

？アヴァランチエクシア・C？カスタムを起動させて、格納庫の壁を破壊し、外に出るとZAFTザフトのMSモビルスーツである？ジン？が？ストライク？に攻撃を仕掛けようとしていた。

？ストライク？の足元後方にはミリィ達がいる。私はすぐさまにスラスターを全開にしながら全周波通信を開き、？ジン？にタツクルをかますと同時に叫んだ！！

「そのトリコカラーのMS！！足元に民間人がいるんですから、もつと機敏に動き回って下さい！！それが無理だと言うなら、？ジン？は私が倒しますから、OSの書き換えをして下さい！！」  
＜シルヴィ！？無事だったの！？それに何でMS何かに乗ってるの！！！？＞

やっぱり、キラがストライクに乗ってるんだ……。音声通信だけなのでキラの表情は分からないけど、声だけで驚いていることが分かった。

「そのMSに乗っているのはキラなんですか！？取り敢えず、話は後です！今は？ジン？の撃退を優先すべきです！」  
<っ！分かった！！>

私の言葉にキラは従い、その場から離れて行った。そして、突然の介入者である私にミゲルが乗っているであろう？ジン？がマシンガンを手に取り、発砲してきた。

私は即座に反応し、？ジン？の攻撃を難なく避けると、GNソードをソードモードに切り替え、スラスターを使って、？ジン？との間合いを詰め、両腕と両足、頭部を一瞬で破壊した。

一瞬で行われた四肢の破壊にミゲルは自分の機体に何が起こったのか分からなかったのか、達磨状態の？ジン？は何も反応しなかった。

そして、数分経って漸く？ジン？のコックピットが開き、緑のパイロットスーツを着た人間が飛び去って行った。

どうせ自爆するだろうと思った私は、即座に？ジン？から離れ、ミライ達の側へと向かい、GNコンデンサーに貯蔵されていたGN粒子をGNフィールドを展開するのに仕様し、防御態勢に入った。

そして、その直後に？ジン？が自爆した。この時、何故かこの自爆の爆風で？ストライク？は大きく転倒した。もしかしたら、バランス系のシステムがまだ出来上がって無かったのかもしれない。

「キラ、大丈夫ですか？」

< な、なんとか…… >

通信で？ストライク？に乗っているキラに話しかけると返事が返ってきた。

「とにかく、近くの公園が何か、広い所に移動しましょう。それと、すぐそこにミリィ達もいますから、彼女達の安全を確保する為にも一緒に連れて行きましょう」

< …… 分かった。でも、何でシルヴィがMSに乗ってるのかをちゃんと説明してね？ >

「はい。後で絶対話します」

私はそう告げると、ミリィ達に近付いて手を差し出し、乗る様に指示して、全員が乗ったのを確認すると、近くにある公園へと向かった。

そして、公園に着くと同時に？ストライク？のPS装甲はフェイスソフトダウンした。

「side out」

「side キラ」

シルヴィの指示で近くの公園に移動した後、MSのコックピットから出ると、僕を見たサイ達はすごく驚いた顔をしていた。

そして、僕に乗っていたMS……、ガンダムの隣にはシルヴィが乗っていたMSが立っていて、シルヴィもMSから降りて来ていた。

シルヴィと話したいけど、まずはガンダムのコックピットで気絶している女性を降ろすのが先決かな？

「サイ、トール！コックピットで女の人が気絶してるんだ。運び出すの、手伝ってー！」

僕がそう言っていると、サイとトールは硬直していた状態からすぐに動く出して、女性を降ろすのを手伝ってくれた。

そして、女性をベンチに寝かし終えて、シルヴィに話し掛けようとしたら、シルヴィは近くから水を持ってくると言って、その場から去って行った。

シルヴィはその場から離れて数分後に、両手に大量のペットボトルを持って帰って来た。シルヴィはそれをミリアリアに渡すと、僕と向き合ってくれた。

そして、僕が“何故、MSに乗っていたの？”と聞こうとした瞬間、女性が目覚めた。

「うう…」

「気がつきました？」

女性が瞼をゆっくり開き、上半身を起こそうとしたので、ミリリアアがそれを支えていた。

「大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとう」

「あの、すみませんでした…。なんか僕、無茶苦茶やっちゃって…」

女性はシルヴィが持ってきた水をミリリアアから受け取って、何も言わずにそれを口にした。

そして、ガンダムの方から物音がしたのに気付いた女性は急に態度を変えた。

「すげ〜なあ。ガンダムっての？」

「動かないのか？」

トールがガンダムに乗り、カズイが外でそれを見ながら口を開いていると、突然女性が頭上に向けて銃を一発撃つと声を発する。

「その機体から離れなさい！」

「なっ…、何するんですか！」



僕は女性の急な行動に抗議したら、女性は銃を向けて僕を黙らせた。そして、トール達が下りてくると女性が口を開いた。

「…あれは軍の最重要機密よ。民間人がむやみに触れて良いものは無いわ。皆こちらへ、1人ずつ名前を」

「サ」

「答える義理も義務もありません」

銃を突きつけられて、答えるしかない状況でサイが答えようとすると、シルヴィが言葉を重ね妨害した。

シルヴィの行動に腹を立てたのか、女性は銃口をシルヴィに向け、再び命令してきた。

「答えなさい!!」

「撃てるものなら撃つてみなさい!!」

シルヴィは女性に反抗すると同時に駆け出し、女性の銃に手を掛け、鳩尾に蹴りを入れた。

女性はシルヴィの速さに反応できず、少しだけ蹴り飛ばされ、仰向けの状態で咳き込んでいた。

そして、シルヴィはそのまま手にした銃を女性に向け、口を開いた。

「民間人に銃を向けるなんて、あなたは本当に軍人ですか？……あ  
あ。連合軍なんて所詮は上層部がコーディネーター相手にテロを起  
こすテロリスト集団のブルーコスモスで構成されてるんでしたね。  
そんな所に所属している人間なんて、所詮はテロリストですから軍  
人なんて呼べる訳ありませんか。  
軍人ではないテロリスト集団の一員であるあなたにも、最後に1つ  
だけいいことを教えて上げます。撃っていいのは撃たれる覚悟のあ  
る者だけです」

シルヴィはそう言い終えると撃鉄を起こして、引き金を引こうとし  
た。

「駄目だ、シルヴィ！！」

僕はシルヴィが引き金を引く前に彼女と女性の間に入った。

「何故、邪魔をするんですか？彼女は私達を銃で脅し、命の危険に  
曝した。それだけでも万死に値します。

それに、その様な行動に出るならば、自分も同じことをされる覚悟  
が当然ある筈です」

「そうだとしても、人殺しは駄目だ」

「人殺しじゃありません。私達の脅威となる存在を排除するだけで  
す。このまま彼女を生かしては、私達の命に関わるかもしれま  
せん。」

私は自分と家族。そして、自分と親しい人に害をなす存在を野放しにするつもりはありません。相手がテロリスト集団であるブルーコスモスの下にいる人間なら尚更です」

シルヴィはそう言っただけで一向に引こうとしない。ミリアリア達も彼女の行動にオロオロするだけである。そんな中、僕の後ろにいる女性が口を開いた。

「私はブルーコスモスではないわ」

「誰がそれを証明すると言うのですか？第一、今まで私の家族の命を狙ってきたブルーコスモスの構成員は、自分の命が危険に晒されるとあなたと同じ様なことを言っていましたよ。」

“俺はブルーコスモスじゃない”、“命令された。俺の意思で狙ったんじゃない”と……。そんな言葉を簡単に信じる程、私はお人好しではありません。

それに、あなたが連合の軍人であるという時点で信じる事ができません。それとも何ですか？自分はブルーコスモスではないから悪くないとでも仰りますか？

私の家族の命を狙ったのが連合と深く関わっているブルーコスモスでも、自分の知らないことには蓋をして関係ないと……。

ならば、話を変えましょう……。あなたは先程、何故私達に銃を向けたのですか？連合の軍人だからですか？

あなたは立場で人を殺すんですか？……………引き金位感情で引きなさい！自分のエゴで引きなさい！」

家族の命がブルーコスモスに狙われた？シルヴィの家族にコーディネーターがいるのか？

そんなことを思っているとシルヴィは銃を構えたまま、僕を押し退けて女性に近付き、引き金を引こうとした瞬間。

「シルヴィ、やめて!!」

「そうだ!!別に殺す必要なんてないって!!」

「俺達なら大丈夫だから!!」

「人の死ぬ所なんか見たくないから!!」

サイ達が一齐に止めに掛かった。シルヴィは暫くの間、その状態のまま女性に銃を向けていたけど、渋々下ろした。

「彼らに感謝しなさい。ゴミ虫以下の価値しかない連合の軍人であるあなたの命に慈悲を与えてくれたのですから」

シルヴィはそう言い終えると、銃にロックを掛けてから引き金を引いて、女性から離れた。

「で、あなたの名前はなんて言うのでしょうか?こちらも名乗ってはいませんが、普通は話を持ち出した側が相手より先に名乗るのがマナーと言うものではないでしょうか?」

シルヴィが敵意を向けたままそう言うと、女性は普通に答え始めた。

「私はマリュー」ラミアス。地球連合軍の将校です。申し訳ないけど、貴方達をこのまま解散させるわけにはいかなりました」

「あなたはまだ自分の立場を理解できていない様ですね」

ラミアスさん言い方が気に入らなかったのか、シルヴィは再び銃の口ツクを外してラミアスさんに向けようとした。

「ちょっと待つて、シルヴィ。それじゃあ話が続かないよ。せめて最後まで聞いてからにして！……で、ラミアスさん。何で解散したらダメなんですか？」

「……事情はどうあれ、軍の重要機密を見てしまった貴方達はしかるべき所と連絡が取れ、処置が決定するまで私と行動を共にして頂かなければなりません。また、あのMSについても聞かなければならないことがあります」

ラミアスさんはそう言いながら、シルヴィの乗っていたMSを見上げていた。

「勝手に中立国の民間人を……。しかも、学生を巻き込んでおいて偉そうに言える立場ではありませんね。」

中立国の民間人である以上、連合とは一切関係ない筈です。ここで勝手に拘束などすれば、外交問題にまで発展しますよ。そのことを分かっていますか？

それにあのMSは私の私物です。オーブの民間人である私の私物を他国の軍人であるあなたが勝手に徴収することはできません。それ

もまた、外交問題です」

シルヴィが正論で攻めるとラミアスさんは悲痛な顔で叫び出した。

「黙りなさい！何も知らない子供が！中立だ、関係ない、と言って  
いけば無関係でいられる。まさか、本当にそう思ってるわけじゃ  
ないでしょう？周りを見なさい！

これがあなた達の現実です。…戦争してるのよ。あなた達の  
外の世界はね」

「私達をその外の世界に巻き込む権利はあなたにはありません。第  
一、この？ヘリオポリス？がこうなった原因は連合にもあります。  
勝手に開き直って偉そうにしないで下さい」

マリユーの話を聞いた後、シルヴィは銃を向けながら返答した。そ  
の後、サイ達と協力してシルヴィを宥め、話し合いを行った結果、  
僕の乗っていたMS……、？ストライク？という名称らしい。

この？ストライク？に追加装備であるパワーパックを装備させ、連  
合軍とコンタクトを取り、ラミアスさんを引き渡して、僕達は早々  
にシルヴィのMS・？アヴァランチエクシア？に乗って救助が来る  
のを待つことにしようと言う話になった。

シルヴィは念の為に？アヴァランチエクシア？に乗り込み、ライフ  
ルをラミアスさんに向けながらミリアリア達から距離を取る様に言  
っていた。

ミリアリアとカズイはシルヴィに言われた通りラミアスさんから距

離を取って待つており、サイとトルはパワーパックが入ったトレーラーを取りに行った。

そして、大型のトレーラーがやって来たので、僕は？ストライク？を操縦して、それを装備しようとした。

その時、？ヘリオポリス？のシャフトが破壊され、ザフトの？シグー？と連合のMAが入って来た。けど、MAはあっさりと武装を破壊され、シグーがこっちに向かって来た。

<キラ！あれの相手は私がしますから、PS装甲を展開して皆を守って下さい！>

シルヴィはそう告げると同時に、？シグー？へと向かって行った。

僕はすぐ様PS装甲を展開して、機体を皆の盾になる様に配置した。

でも、結局それは意味をなさず、数瞬後には？シグー？の頭部と四肢が？アヴァランチエクシア？のライフルによって撃ち抜かれ、？シグー？は残った胴体とスラスターだけで撤退していった。

そして、？シグー？の撤退とほぼ同時に？ヘリオポリス？の山が破壊され、そこから戦艦が現れた。

「side out」

### 第3話 「崩壊の大地…」

「side シルヴィ」

クルーゼの撤退と同時に現れた？アークエンジェル？は、こつちに攻撃を仕掛けてくるかと思ったら、そうではなく着陸を始めた。

どうやら、キラが通信でコンタクトを取ったみたいだ。私はすぐに地上に降りると、？アヴァランチエクシア・C？カスタムの手にミリィ達を乗せ、マリューさんを手に乗せた？ストライク？と共に第一カタパルトへと入った。

そして、？ストライク？がマリューさんを降ろすと同時に？アークエンジェル？に乗っていたナタルと整備兵、武装した警備兵がやって来た。

「ハロ、？アヴァランチエクシア？をお願いね」  
<リョウカイ！リョウカイ！！>

私はハロに全システムを預けると、コックピットから出た。そう言えば、言い忘れていました。この？アヴァランチエクシア・C？カスタムのコックピットには？ガンダムデュナメス？と同じ様にハロを置く所



があります。

ちなみにこのハ口は？ダブルオーザンライザー7S/G？セランソードに乗せてMSを扱う経験のある程度積ませたハ口です。

「ラミアス大尉！」

私がラダーに掴まって降りていると、ナタルがマリューに声を掛け、駆け寄っていた。

「ご無事でなによりでありました！」

「あなた達こそ、よくアークエンジェルを。お陰で助かりました」

再会を喜ぶマリューさんとナタルの横からパイロットスーツ姿のムウ<sup>II</sup>ラ<sup>II</sup>フラガが現れた。

その後ろでは、整備兵達が？アヴァランチエクシア・C？カスタムと？ストライク？から降りて来た私とキラに驚いている。

「おいおい…、何だつてんだあ？子供じゃねえか。あの坊主と嬢ちゃん<sup>II</sup>がアレに乗ってたつてえのか！？」

私は警戒しながら、キラ達は無警戒でその遣り取りを眺めていると、マリューさん達と話を終えたムウさんがいきなり愛想の良い笑顔を

浮かべながら私とキラに向かって口を開いた。

「へえ、こいつは驚いた」

「何ですか？しかも、厭らしい笑みをニヤニヤと浮かべながら近付いてくるなんて……。セクハラで訴えますよ」

私がキラを庇いながらそう言うと、ムウさんは口元を引き攣らせながら話を続けた。

「セ、セクハラって……。ゴホン！君達、コーディネイターだろ？」

ムウさんは一度咳き込む、話を続けた。そして、その言葉にその場が凍り付き、ブリッジから来たマリューさんとナタルが厳しい表情でムウさんを見つめている。

「答える義理も義務ありません。それに、いきなり人の遺伝子分類を聞いてくるなんて、セクハラですか？訴えますよ」

「えっ！！？それってセクハラになのか？……いや、それよりそ  
ちのMSはお嬢ちゃんのか？  
モビルスーツ

俺が与えられてた？G？のデータに該当するもんがなかったんだけど……」

「答える義理も義務もないと言った筈です。しかも、個人のプライベートに関わることを親しくもないのに聞いてくるなんて、人としてのマナーがなって無いんじゃないですか？

これだから雑種は困るんです。いい加減にしないとセクハラで訴え

る前に、雑種の家系を絶つ為にあなたを去勢しますよ」

「いや、去勢って……。しかも、雑種？そっちの方がセクハラの上、パワハラじゃ……」

「……何か言いましたか？」

「いいえ」

ムウさんはそう言うと、両手を上げて私達から距離を取った。しかし、今度は別の人間が絡んで来た。

「ふざけるな！！こちらの質問に答えろ！！」

今度絡んで来たのは生真面目軍人のナタルだ。銃を構えながらそう叫び、ナタルの後ろには武装した7人の警備兵達が銃を構えていた。

その光景を見た瞬間、私の中で種が弾け、私はSEEDに覚醒した。私は袖口に仕込んでいた投げナイフを両手で8本手にすると、それを寸分違わずにナタルと警備兵が構えている銃の銃口に投げ、ナイフで銃口を塞いだ。

ナイフが銃口に刺さると同時にマリューさんから奪った銃と、私自身が持ち歩いている護身用の銃を両手で発砲し、ナタル達が持っている銃を弾き飛ばした。

ここまでに掛かった時間は僅か数秒。その光景を目の当たりにしたその場にいた者は全員が愕然としていた。そんな中、私は銃をナタルに構えたまま口を開く。

「流石は軍上層部の8割がブルーコスモスなんて言うテロリスト集団の幹部で構成されている軍隊だけのことはありますね。

言うことを聞かない者は他国の……、中立国の民間人であっても銃を使って脅しますか。テロリストのパシリは所詮テロリストと言うことですね」

「おいおい……。嬢ちゃん、今の話、ホントかよ？」

「事実です。連合の軍上層部の8割はブルーコスモスに所属し、国防産業連合理事会の理事の約半数もブルーコスモスの幹部で構成されています。

コーディネーターを殺す為に平気でナチュラルを巻き込むテロリストの拡大版みたいなものを、未だに正義だと信じ続けている地球の愚かな雑種達が私には哀れでなりません」

私の言ったことにその場にいた連合の兵士は全員が信じられないと言った顔をしていた。そんな中、ムウが再び口を開いた。

「……嬢ちゃんはテロが、ブルーコスモスが憎いのか？」

「テロが憎くて悪いですか？……私の両親はナチュラルであるにも拘らず、ブルーコスモスのテロに巻き込まれて死にました。

……ブルーコスモスが主張している様に、全ての始まりは人類初のコーディネーター・ジョージ・グレンが巻き起こした混乱にあるというのは確かでしょう。

彼の巻き起こした混乱によって、ナチュラルはコーディネーターを妬み、コーディネーターはナチュラルを劣等種と蔑む様になっているのが現状です。

ですが、そう言った感情が絶対的に悪いと言う訳ではありません。遺伝子操作に至ってもそうです。

でも、どうしてもその中で世界は歪みます。それ位は分かっています。でも、その歪みに巻き込まれ、私は両親を失いました。

そして、私の血の繋がらない妹達も同じ様に家族を失い、今も命を狙われています。そんな状態でブルーコスモスを憎まず、あなた方連合の兵士を信じることができると言うのですか!？」

私は銃を構えた状態で肩を震わせながら叫んだ。私の質問に応えられる人間などその場にはいなかった。私と一番距離の近いムウは？  
アヴァランチエクシア・C? カスタムに目を向けながら口を開いた。

「このMSは嬢ちゃんの私物だと言ってたが、どうしてテロや争いを嫌ってる嬢ちゃんがこんなもん持ってたんだ？」

「これはロックフオード製のMSです」

「ロックフオード？あのオーブのロックフオード財団のか!？」

「はい。……そう言えば、まだ名前を名乗ってもいませんでしたね。

私はシルヴィア「ロックフオード。ロックフオード財団の総帥です」

私が自分の名前と立場を口にする、その場にいる全員が固まった。恐らく、ロックフオード財団の総帥が目の前にいることと、私がコーディネーターと同等の実力を有するナチュラルであると言った話を聞いたことがあるからだろう。

あと、固まる理由として考えられるのは、ロックフオード財団は名目上ではオーブにあるけど、実際は完全にオーブから独立した存在であり、その影響力は地球圏だけでなく、プラントにもあると言ったものであり、その財団の総裁に銃を向けてしまったからかもしれない。

まあ、そんなことは私にはどうでもいいので、全員が固まっている中、私は言葉を続けた。

「そして、このMSは私の大切なものを守る為の剣であり、争いの抑止力とする為に造り上げた機体です」

「抑止力？多寡がMS1機で何ができるんだ。それにMSなら活動限界だつてあるだろう」

「いいえ。このMSには活動限界など存在しません。このMSには我が財団が開発した半永久機関が搭載されているのですから」

私の言葉にその場にいた全員が？アヴァランチエクシア・C？<sup>カスタム</sup>を驚いた顔で見上げ、整備班長のマードックが声を上げた。

「半永久機関って、核エンジンか！？そんなのNジャマー<sup>ニュートロン</sup>の影響で使えない筈だろ！！？」

「核エンジンではありません。私達、ロックフォード財団が独自に開発した新しい動力源。GNドライブ……。通称、太陽炉」

「GN…、ドライブ？」

「【GUNDAM NUCLEUS DRIVE】の略称です。重粒子を蒸発させることなく質量崩壊させ、陽電子と光子を発生させることにより、莫大なエネルギーを半永久的に生み出す機関です。出力の割に小型化が容易である上、排熱量の低さから隠密性にも優れています。ちなみに、？？アヴァランチエクシア・C？<sup>カスタム</sup>を奪おうなどと考えないで下さい。

あれには生体認証システムが搭載しており、私以外の人間がコックピットに搭乗すると、入口が完全にロックされ、GNドライブが暴

走し、自爆する様に設定しています。多寡がMS1機の自爆でも、この戦艦ごとコロニーを破壊できるだけの力がありますよ」

私以外に扱えないことを指摘すると、ナタルが睨んで来た。大方、  
？アヴァランチエクシア・C？カスタムを接收しようとしても考えていたのだろう。

「取り敢えず、私はテロリストのパシリと慣れ合う気もありませんし、大切な友人を戦争に関わらせるつもりありません。  
？アヴァランチエクシア・C？カスタムならば、地球へ単体での降下も可能ですし、早々に立ち去らせて頂きます」

私はそう告げると、キラ達に？アヴァランチエクシア・C？カスタムの影に移動する様に指示し、銃を構えたままラダーに近付き、マリューさん達に離れる様に命じた。そして、私がラダーを掴もうとした瞬間、声を掛けられた。

「待って下さい！！」

「……何ですか？」

「あなたが連合を嫌っているのは分かりました。ですが、せめて月本部と合流するまで力を貸してもらえないでしょうか？」

現時点で最高責任者でもあるマリューさんが私を引き止め、そう告げて来た。クルーの安全を確保する為にも、圧倒的な戦闘力のある私が必要なようだ。

「……………見返りは何ですか？」

「…え？」

「え？じゃありません。私は商人であって軍人ではありません。戦闘に出るとなると命を懸けることになります。

自分の為<sup>な</sup>すべきことや、大切な人を守る為に命を懸けるならともかく、嫌<sup>な</sup>ってる集団の為に命を懸けるのですから、見返りを求めるのは当然はないですか？

それに何かを得るにはそれ相応の対価が必要です。私は命を懸けるのですから、それに見合った対価を支払って頂かなければ割に合いません」

私の言っていることが正論である為、マリューさんは黙り込んでしまった。人の命に見合う対価が思い浮かばないのだろう。取り敢えず、気紛れで助け船を出すことにした。

「……………今からではシェルターに入ることできないので、あなたが戦争に勝手に巻き込んだ？ヘリオポリス？の学生の身柄の安全の確保と、今後彼らを巻き込まないと言う確約が欲しいですね。

勿論、心理誘導などで自発的に戦闘に参加したかの様に裏工作するのも却下です。もし、それが判明した場合、その時点で彼らを連れて艦を離れます。

また、彼らに銃を向けるなどの行為も禁止です。これを行った場合、私はその者を射殺し、彼らを連れて艦を離れます。

あと、私がこの艦にいる間、大佐相当の権限と作戦行動立案、MS及びMAの戦闘指揮権を与えてくれる上、月艦隊との合流後に褒賞を貰えるのならば考えましよう。



当然、これにより発生した問題の責任を取るのも全てあなた方で、私が一切責任を取らないのも絶対条件です」

理不尽と言えば理不尽な要求だ。でも、人一人の命が対価であることを考えると安くもある。

こっちは戦場で散ることが前提である軍人とは違い、民間人なのだから尚更だ。

「……少し、待って貰えますか？」

「できるだけ早くして下さい。地球に向かうなら、Z A F T の攻撃が再開される前に立ち去りたいですから」

私がそう告げると、マリューさんはムウさんやナタル達と話し合いを始めた。

恐らく、実際に？ジン？と隊長機である？シグー？を瞬殺した所を見たマリューとクルーゼを達磨にした所を見たムウは私を戦力として入れたいと思う筈。

逆に私の戦闘を見ていないナタル達からすれば私の要求はとても受け入れられるものではない筈だ。まあ、私としてはどちらでもいい。

少しの間、話し合いがされた後、マリューさんが代表する様に前に出て来た。

「あなたの要求を受け入れます。なので、月艦隊と合流するまで行動を共にして貰えないかしら？」

「……………分かりました。月艦隊と合流するまで行動を共にしましょう。ただし、私のMSには一切手を触れないで下さい。データなどもあなた方に渡すつもりはありませんから」

「機体には一切手を触れないことを約束します」

「では、取り敢えずMSを格納庫の方に」

私はマリューさんの言葉を信じて頷き？アヴァランチエクシア・Cカスタム  
？を格納庫に移動させる為にラダーを掴もうとすると、第三者の声が聞こえた。

「side out」

「side キラ」

シルヴィとラミアス大尉が会話する中、僕達は話に入ることができず、ただ聞いていることしかできなかった。

そして、最終的にシルヴィは僕達の安全確保などを条件として、この艦が月艦隊と合流するまで行動を共にすることにした。

戦闘になれば、シルヴィは絶対に出なければならない。フラガッて大尉もMAで出るかもしれないけど、それでもシルヴィに負担が掛かることは必至だ。

？ストライク？に至っては、前のOSではナチュラルやコーディネーターに関わらず機体の動きを処理しきれずに的になるだけだし、僕が作り変えたOSはコーディネーター用だから、ナチュラルには操縦できない。

負担になるだけなら、まだいい。でも、下手をすればシルヴィが死んでしまうかもしれない。シルヴィに生きていて欲しいと思った僕は口を開いた。

「あのー！」

僕が声を上げたことで、全員が僕の方を向いた。そして、ラミアス大尉が口を開いた。

「何かしら？」

「あの……。僕を？ストライク？に乗せて貰えないでしょうか？」

僕の言葉にその場の全員が固まった。もちろん、シルヴィも例外ではない。

「……キラ。自分が言ってることがどういうことか分かってますか？MSに乗ると言うことはどんな理由であろうとも戦争をするということなんですよ？」

「でも、今？ストライク？を動かすことができるのは僕しかいない

し……」

「ただ、何かをしなければならぬと言う義務感だけでパイロットになると言っているのなら、止めて下さい。戦争と言うことは、相手の命を奪わなければならないということです」

「でも！シルヴィはコックピットを狙わずに相手は倒したじゃない。僕もそうすれば」

僕の言葉にラミアス大尉とフラガ大尉以外の連合の軍人は驚いていた。多分、Z A F T の M S パイロットでもできる芸当じゃないからだろう。

「確かに私は相手の戦闘能力を奪うだけで戦闘を終了させることができます。ですが、戦いに出る以上覚悟が必要となります。キラにはその覚悟がありますか？」

「覚悟？」

「………ラミアス大尉にも言いましたが、撃つていいのは撃たれる覚悟のある者だけです。自分が相手に撃たれる覚悟がなければ、引き金を引く資格はありません。

私は無駄死にするつもりも、自分の命を早々に投げ出すつもりもありませんが、その覚悟だけは常にしています。

それに正当防衛であつたとしても、今まで私の家族を襲ってきたブルークスモスを私が手に掛けたことには変わりないですし、自分が綺麗な人間だと今更思ってもいません。

でも、あなたは違います。あなたは私と違って、まだ綺麗なんです…… MS に乗って戦いに出れば、望まなくても、人を殺めなければならぬかもしれません。

その時、覚悟がなければ、人を殺めてしまった自分に絶望し、いずれ自分を殺すことになります。だから、どんな理由があろうとも、

撃たれる覚悟がないならばMSに乗るなどと言わないで下さい」

僕達を巻き込みたくないという思いが込められた様な真剣な眼差しで訴えてくるシルヴィに僕は何も言えず、シルヴィが？アヴァランチエクシア・C？カスタムに乗り込み、格納庫へと向かって行くのを見送るしかできなかった。

そして、僕の頭の中ではシルヴィの“撃っていいのは撃たれる覚悟のある者だけ”と言う言葉が何度もリピートされていた。

僕にシルヴィと同じ覚悟ができるのか……。そんなことを考えていると、ラミアス大尉に話し掛けられた。

「あなた。えつと……」

ラミアス大尉に何か言おうとしたけど、途中で止まった。そう言えば、シルヴィ以外は自己紹介をしていない。

「キラ、キラ、ヤマトです」

「そう。キラ君、悪いのだけど？ストライク？を格納庫に移動させて貰えないかしら？」

「ラミアス大尉！？」

ラミアス大尉が僕に行って来たことに、その場にいた黒髪の女性が声を上げた。

「バジール少尉、さっきも彼が言っていたけど、今？ストライク？を動かせるのは？ジン？と交戦する際にOSを書き変えた彼だけなのよ」

「えっ！！？」

バジール少尉と呼ばれた女性は、ラミアス大尉の言葉に驚いた顔をしていた。

「で、頼めないかしら？」

「わ、分かりました」

ラミアス大尉の願いに僕は答え、？ストライク？に乗り込み、格納庫へと向かった。そして、？ストライク？を固定し終わると、サイ達と一緒に部屋へと案内された。

案内された部屋は共同部屋の様で、備え付けられている2段ベッドが2つある。そして、皆でベッドに座っていると、艦内通信が流れた。

<ラミアス大尉、バジール少尉！至急ブリッジへ！MSです>

その艦内通信に全員が顔を上げた。

「MSって……。もしかして、また戦闘になるの？」  
「……そういうことになると思う」

ミリアリアの質問にサイが答え、ミリアリアはどんどん顔色が悪くなっていった。そんなミリアリアの肩をトールが抱いている。

「シルヴィ……。シルヴィは大丈夫かな？」

その場にいた全員が心配していることをミリアリアは口にした。

「戦闘になったら出るって言ってたし……………」

「彼女なら大丈夫なんじゃない？Z A F Tの？ジン？や？シグー？  
をやっつけてたんだし……………」

「カズイ！」

ミリアリアの心配を他所に、カズイは何の根拠もなくそう言い、サイがそれを窘めた

「でも！シルヴィは女の子だし……………」

「ああ。どんなに強いつて言っても心配だよな。それに相手が1機  
だけとは限らない訳だし……………」

トールの言葉を聞いて、僕は頭が真っ白になった。シルヴィの戦闘は2回見たけど、2回とも相手は1機だけだったんだ。

もし、トールの言った通り、複数で取り囲まれたりしたら……。そう思った瞬間、僕はベッドから立ち上がり、サイ達が制止しようとするのも振り切って格納庫へと向かった。

「side out」

「side シルヴィ」

MSが来たという報告を受けて私は早々に出撃したんだけど、今の状況にすごく驚かされている。

なんたって、私の記憶が正しかったら襲ってくるMSは？ジン？が4機と？イージス？の合計5機だった筈だ。

でも、実際には追加で？ジン？が2機と？デュエル？、？バスター？、？ブリッツ？がいるのだ。

「くっ！！どうして、イザーク達まで来てるの！！？クルーゼを達磨にしたから！！？」



私はそんな悪態を吐きながら？アーケエンジェル？に通信を繋いだ。

「聞こえますか、？アーケエンジェル？！！今から敵MSに攻撃を仕掛けますが、数が多過ぎますから？ジン？が3機位向かうかもしれませんが、その位は対処して下さい！！」

私はそう告げると同時に通信を切り、すぐそばにいるハロに命令した。

「ハロ！！GNミサイルを誘導型に切り替えて発射！！それと同時に、ライフルモードのGNソードでできる限りコックピットを外して狙い撃つからサポートをヨロシク！！」

「リョウカイ、リョウカイ！！GNミサイル発射！！狙い撃ツゼ、狙い撃ツゼ！！」

アスラン達とまだ距離があることを機に私は攻撃を始めた。大量のGNミサイルとビーム攻撃で4機の？ジン？を戦闘不能に追い遣り、デュエル？の左腕を破壊した。

なんと、GNミサイルはPS装甲にも有効の様で、？デュエル？の左腕を盾と一緒に破壊できたのだ。

そして、私を危険と感じたのか、アスラン達が駆る？G？シリーズが私に向かって来て、残った2機の？ジン？は？アーケエンジェル？へと向かおうとしている。

ちなみに、重粒子砲を装備したミゲル機は早々に戦闘不能に陥って貰い、他の戦闘不能機と共にお帰り頂いた。

私はアスラン達の執拗な攻撃を回避しながら、四肢破壊や頭部破壊を狙おうとするが、流石に4対1では上手くいかず、焦っていた。

そんな時、急に通信が入ってきた。こんな忙しい時に一体誰だ！？と思いながら通信を開くと、思わぬ人物が出た。

<シルヴィー!!>

「キラ!!!?何で!?!」

なんと、通信を開いてきたのはキラだったのだ。左側のモニターを見るとソードストライカーを装備した？ストライク？が近付いて来ていた。

<シルヴィーだけに戦わせることなんてできないと思って!>

「……詳しい話は後でしましょう。キラ、あの赤い機体の相手をお願いできますか？」

<!!!?わ、分かった!!>

私が通信を終えると、キラは？イージス？へと向かい、私は？デュエル？、？バスター？、？ブリッツ？へと向かった。

そして、イザーク達が仕掛けて来た攻撃を全て避けた後、各機に蹴りを入れて吹っ飛ばし、スラスターを全開にして？アークエンジェ

ル？に近付こうとしている？ジン？へと向かった。

私が近付いて来ていることに気付いた？ジン？は振り返ろうとするが、それは私からすれば非常に遅く、私はすれ違いざまにGNソードで？ジン？を達磨にし、？アークエンジェル？から引き離す様に蹴りを入れた。

しかし、切断したにも拘らず、何故か？ジン？が装備していた短距離誘導弾発射筒からミサイルが発射された。もしかしたら、マニピュレータを動かす電気信号に誤差が生じたのかもしれない。

発射されたミサイルは？アークエンジェル？には向かわず、？ヘリオポリス？の地表へと向かい、コロニーに大穴を開けた。

これによつて、？ヘリオポリス？からシエルターが救命艇として射出され、コロニーに空いた穴により、コロニー内には乱気流が発生した。

私はなんとか機体を制御し、流されない様にしているが、他の機体はそういう訳にもいかず、コロニーの外に放り出されて行く。

そんな中、？ストライク？と繋いだ状態の通信機から悲鳴の様なものが聞こえてきた。

<うあああつ

！！>

「キラ！！？」

モニターを見ると、乱気流に流されている？ストライク？が映し出

されていた。私は近付こうとするが、乱気流の影響で機体制御をするのが精いっぱい、？ストライク？が虚空へと引きずり込まれるのを見ていることしかできなかった。

「side out」

### 第3話 「崩壊の大地…」（後書き）

今回はコードギアスのルルーシュの名台詞である「撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ」と、ガンダム00のハレルヤの名台詞「引き金くらい感情で引け、己のエゴで引け」の2つをネタとして使わせていただきました。

そして今回はガンダム00のロックオンの台詞をネタとして使いました。どうだったでしょうか？

あと、GNミサイルはPS装甲に有効という設定にさせて頂きました。ご都合主義ですので気にしないで頂けると幸いです。

次回はヘリオポリス宙域からの脱出話です。ここで原作ではありえない行動を取ります。

更新に時間が掛かりそうですが、どれだけ時間がかかろうと更新はするつもりなので、その点をご理解頂けると幸いです。

#### 第4話 「サイレント・ラン…」 (前書き)

こんばんは、エミリアです。

久しぶりの投稿です。いや、本当に……

つというか、今回は話の流れがグダグダかもしれません。

気にして頂くことを願う限りです。

つということで、お楽しみください。

## 第4話 「サイレント・ラン…」

「side シルヴィ」

どこぞのMSが拠点攻撃用の重爆撃装備なんかで来たせいで？ヘリオポリス？が壊れてしまった。

しかも、そのせいでキラが外に飛ばされて行方不明。私は姿勢制御ができたお陰で？アークエンジェル？から殆ど離れることがなかった。取り敢えず、？アークエンジェル？と通信を繋ぐことにした。

「？アークエンジェル？！聞こえますか！！」  
「こちら、？アークエンジェル？。嬢ちゃん、無事だったか」

通信に出るのはナタルかと思いきや、実際に出たのはムウさんだった。

「なんとか無事です。ですが、？ストライク？と逸れてしまいましたが。こちらでも搜索しますが、そちらでも呼び掛けて下さい」  
「了解」

「……それと、私を譲ちゃん呼ばわりしないで下さい。去勢して、

雑種の家系を絶ちますよ?」

<Yes, mam!>

ムウさんはそう言うと同時に通信を切った。私は通信が切れたことを確認した後、キラの搜索を始めた。

キラを見つけるのに時間が掛かるかと思いきや、意外と簡単に見つかった。搜索を始めた数分後にコロニーの残骸であるデブリと一緒に漂っているのを発見したのだ。

私は発見すると同時に?ストライク?への通信を開き、何度もキラに呼び掛けた。

「キラ!キラ!無事ですか!?無事なら応答して下さい!」

<うつ……。シルヴィ?>

「キラ!大丈夫ですか!」

<え...?あつ、うん。大丈夫だよ>

「……そうですか。では、?アークエンジェル?へと戻りましょう」

キラと一緒に?アークエンジェル?へ戻ろうとすると、途中で漂流している?ヘリオポリス?の救難ボートを発見した。

<シルヴィ...、あれ>

「……推進部が壊れて漂流してるみたいですね。このまま放って置いてもオーブから救援がすぐに来ると思いますけど、周辺のコロニーの残骸も熱を持っていますから、リーダーや熱探知も役に立たない



ので見付けてもらえない確率の方が高いかも知れません……」

<そんな!!>

「……………？ヘリオポリス？が壊れてしまった原因は私や連合にありますし、このまま連れて行った方が得策ですね」

私はそう言い終えると、キラに救難ボートを持ってもらい、？アー  
クエンジェル？へと向かった。

ちなみに、何故私の方が救難ボートを持たなかったかと言うと、？  
アヴァランチエクシア・C？カスタムは両手がGNソードで塞がってるから  
である。

？アークエンジェル？に近付くと、？ストライク？が持っている救  
難ボートに気付いたナタルが食って掛かって来たので、キラが反論  
しそうになるのを止めて私が口を開いた。

「平和を求めて？ヘリオポリス？で暮らしていた人達を勝手に巻き  
込んでおきながら、更に見殺しにしろですか……。

それが連合の正義ですか？……それに？アークエンジェル？におけ  
る現在の私の立場は大佐相当であると契約した筈です。

連合では上官…、5つも階級の違う者の命令に意見することができ  
るのですか？ならば、本当に軍と言う名を掲げたテロリスト集団で  
すね」

<ぐっ……!!>

ナタルが私の言ったことに歯を食いしばり、モニター越しに睨んで  
きている。

<構いません。救難ボートと一緒に戻って下さい>  
<艦長!!!>

私とナタルの遣り取りを見兼ねたマリューさんが口を開いたが、ナタルはそれに異議申し立てする様に声を上げた。

<バジール少尉。現在、私達の中で一番発言権があるのはロックフォードさんなのよ。それはあなたも了承した筈でしょ?>  
<しかし!!!>

<文句ばつか言ってる、あの子は俺達を見捨てて、仲間や救難ボートと一緒にどっかに行っちゃまうぞ。

そうだったら、この艦でともに戦えるのは俺の?ゼロ?だけになっちゃう。そんなじゃローラシア級1隻とだって遣り合えないどころか、下手すりゃ墜されかねないぞ>

正論を言うマリューさんに文句ばかり言うナタル。そして、そんなナタルに自分の考えを言うムウさん。いや、全く以てムウさんの言う通りです。

あまり文句ばかり言われると、仕舞いにはキラ達を連れて?アークエンジェル?から離れます。

そんなことを考えているとMSハッチが開いたので、私はキラと共に?アークエンジェル?の中に入った。

キラが救難ボートを格納庫の床に置こうとしているのを見ながら私は？ストライク？に通信を繋いだ。

「キラ」

<シルヴィ？どうしたの？>

「私はブリッジの方に用事があるので先に行きます。キラは？ストライク？を固定し終えた後、ミリィ達の所に行って下さい」

<え？あつ、うん。分かった>

「それと……、？ストライク？で出てきたことに関して、後で説教をさせて貰いますので覚悟して置いて下さいね」

<えっ！！？ちょ、シルヴ >

キラが言い訳をする前に通信を切り、コックピットから出るとそのままブリッジへと通じているエレベーターへと向かった。

私はエレベーターに乗り込み、ブリッジへのボタンを押した。10秒位で着いた様で扉が開くと、そこでは今後の針路に関する話し合いが行われており、その会話が聞こえてきた。

「艦長、私は？アルテミス？への寄港を具申致します」

具体的に最初に聞こえてきたのはナタルの発言だった。マリューさんとムウさんはナタルの提案に顔を上げ、ナタルは更に言葉を続ける。

「あそこは現在、本艦の位置から最も取りやすいコース上にある友軍です」

「？傘のアルテミス？か……………」

ナタルの進言にそう呟いたムウを視界に入れながら、私は話し合いに割り込んだ。

「それはあまり良い策とは言えませんが」

私がそう口にした瞬間、全員が驚いた顔で私の方を向いてきた。どうやら、私が来たことに気付いてなかったらしい。

まあ、そんなことは正直言ってもいいので、私は自分の意見を口にする。

「確かに？アルテミス？は連合では友軍でしょうが、あそこはユーラシア連邦の要塞。同じ連合軍でも、ユーラシアと大西洋連邦は結構いがみ合っている様で足並みが揃わないことを知っていますか？それに、この？アークエンジェル？は新造艦であり、連合の識別コードを持ってない筈では？」

？アルテミス？に行っても、それを口実に国籍不明艦として拿捕されて、？アークエンジェル？と？ストライク？のデータを取られるのが関の山です。

あと、デコイを使って月基地へと向かった様に見せ掛けて慣性航行で？アルテミス？に向かおうとしても、ZAF<sup>サブ</sup>Tはそれも読んで挟み打ちを狙ってくるでしょう」

「くっ！ならどうする！このままザフトに投降しろとも言つか  
！！？」

私の正論に急に逆ギレっぽく大声を上げてくるナタル。そして、そんな彼女を気にすることなく私は口を開いた。

「誰もそんなこと言ってません。要はザフト側が行くとも思っていない所に針路を向けて逃げきれればいいです。

まず2発の<sup>デコイ</sup>の発射準備をします。その後、？アークエンジェル？のエンジンを始動させ、1発目のデコイの発射と同時に月基地へと向かう様に仕向けます。

この時のデコイは月基地へと向かう最短のルートへと向かう様に設定し、？アークエンジェル？は大周りのルートを使います。

そして、途中で慣性航行へと移行し、エンジン停止と共に用意しておいたもう1発のデコイを大周りのルートに発射。私達は<sup>ヘルト</sup>デブリ帯向かいます」

「デブリ帯ですって！！？」

私の策に驚くマリューさん。私は彼女の言葉に頷き、言葉を続ける。

「はい。？アークエンジェル？には？ヘリオポリス？から弾薬などの物資を補給しましたが、どうしても水などの問題は発生します。

デブリ帯<sup>ヘルト</sup>に行けば、放棄された艦なども多く存在し、そこから補給することもできる。上手くいけば、周回軌道にある？ユニウスセ

ブン？を発見し、そこから水や食料を補給することもできます。  
一般的に考えれば、デブリ帯<sup>ベルト</sup>に向かうなんて考え方は自殺行為を受け取られることが多いので、ザフトも私達がそこに向かうとは思いません。いい答です。

そこで補給を終えた後に月基地へと向かえば、被害を最小限に抑えることができると思いますが？」

私はそう言っ、その場にいたクルー全員に目を向けたが、誰も何も言おうとしなかった。私の策とナタルの策のどっちの方がいいか悩んでいる様だ。そして、暫くしてからムウさんが口を開いた。

「……………まあ、メリットなんかを考えるとロックフォード一級特佐の方がいいか」  
「フラガ大尉！！」

ムウさんの発言に不満があるのか、ナタルが大声でムウさんの名前を口にした。

あつ、ちなみにムウさんの言った特佐とは戦時特別佐官の略称で、一級特佐は大佐相当に当たる。

「敵に見付かる可能性はどっちも同じだろ？到着するまでの時間は確かに？アルテミス？の方が早いが、特佐の言った様に拿捕される可能性もある。」

俺達も足止めされる訳にはいかんし、補給を受けられる保証もない。そう考えれば、特佐の策は奇策だが、上手く立ち回れば弾薬と水の

補給はできるんだ。十分にメリットはあるだろ？」

「しかし！」

「今は被害を最小限に抑えて、迅速に月艦隊と合流することが俺達の任務だろ？なら、誰が考えた策であろつと最善の策を選ぶべきなんじゃないか？」

「くっ！……り、了解しました」

私の策であることが気に食わないのか食って掛かっていたナタルもムウさんの説得により渋々ながら納得し、マリューさんも私の策を選び、ブリッジが慌ただしくなった。

「デコイ用意！1発目の発射と同時にデブリ帯<sup>ベルト</sup>へと航路修正の為、メインエンジン噴射を行なう。後に2発目の発射と同時に慣性航行に移行。第二戦闘配備！艦の制御は最少時間内に留めよ！」

マリューさんの指令によってデコイの撃ちだし準備を始める。ちなみに私は2発目のデコイ発射後の慣性航行への切り替え指示をする為にCICへと向かった。私の隣の席にはムウさんが座っている。

「ザフトが？アルテミス？に行ったと勘違いしてくれるのなら、サイレントランニングは約2時間ちよつとといったところですね」  
「……………後は運だな」

私がサイレントランに必要な時間を口にすると、隣のムウさんはそう呟いた。そして

「デコイ発射！メインエンジン噴射！艦、デブリベルトへの針路へ航路修正！」

マリューさんの号令と共にサイレントランが始まった。

「side out」

「side ムウ」

サイレントランを始めて早1時間。ロックフォードの嬢ちゃんは一瞬の間もなくメインエンジンの停止と同時にデコイを発射する神業的作業を終えるとブリッジから出て行った。

恐らく、？ヘリオポリス？で一緒だった坊主達の所に行ったんだろう。で、嬢ちゃんが居なくなったブリッジで俺は艦長と副長の3人で今後のことについて話すことになった。

「この先、どうするつもりだ？」

「どう…とは？」

「ZAF<sup>サブ</sup>Tと戦闘になった時、どうするかってことさ。このままクルーゼのナス力級を振りきれたとしても、この先で戦闘が無いとは



限らないだろ？」

「……そうね」

「あの嬢ちゃんが強いことは分かってる。なんたって、Gを3機と？ジン？を6機相手にしても被弾しなかったどころか圧倒してたんだ。」

だが、この先はそれ以上の敵を相手にする可能性もある。嬢ちゃん1人で凌げない局面もある筈だ。

無論、俺も全力は出すが嬢ちゃん程の戦果は挙げれる自信はない。

せめて、？ストライク？が使えれば話は別かも知れんが……」

そう。せめて？ストライク？のOSがナチュラルでも扱えるものだったら、シミレーションをできる時間さえあれば何とかなるかも知れないんだがな。そんなことを思っていると副長がとんでもない事を口にした。

「ならば、彼女と共に乗艦したコーディネーターに乗せれば

」

「バジール中尉……」

「おいおい。それ、本気で言ってるのか？そんなことをすれば嬢ちゃん俺達を見捨てて坊主達とMSで出てっちゃうんだぞ。」

拘束しようにも、嬢ちゃんはかなり力の戦闘技術を持つてる。下手すればMSデッキまでの通路が死体まみれになる上、エアロックが破壊されるぞ？」

「しかし

かし」

「しかし、案山子かかしもない。取り敢えず、穏便に話を進めるべきだ。坊主に協力して貰ってナチュラルでも操縦可能なOSを作って貰うか、気休め程度だが割と安全な後方から砲撃支援をして貰うか。

どっちにしても、こっちから相手の方に出向いて話してみるしかない

い。それが俺達が生き残るのに最善なんだからな」

「……なら、艦長である私が直接行って話した方がいいですね」  
「当然、戦闘に参加する俺もな」

艦長はそう言つて席から立ち上がった。俺も自分から言い出したことでもあるんで、同行することにした。すると

「艦長！フラガ大尉！！」

「……バジール中尉。軍人としてのプライドってのもあるだろうが、生き残る為にはそれが枷にしかないってこともある」

俺はそう彼女に告げると艦長と共にエレベーターへと乗った。……  
……はあ、嬢ちゃんが連合を嫌う理由も分かった気がする

「side out」

「side キラ」

シルヴィに言われた通り、？ストライク？を固定し終えた僕がコックピットから出ると、救難ボートに乗っていた避難民の受け入れが行われていた。

そしてこの時、僕は偶然にも同じカレッジの学友のフレイ「アルスター」と会った。フレイは僕に気付くところちに向かって来た。

「あなた、サイの友達の…!？」

「フレイ？フレイ」アルスター!？」

「ねえっ、一体何があったの??ヘリオポリス?は?私、ジェシカ達とはぐれちゃって……」

急に抱きつかれた僕は驚いたけど、それよりも混乱してるのか質問してくるフレイを落ち着かせることにした。

そして、サイ達が無事であることを伝えた後、僕はフレイと一緒にサイ達がいる部屋へと向かった。

部屋に着くと、フレイはまっしぐらにサイの胸へと飛び込んだ。抱きつかれたサイは驚いた顔をしてたけど、すぐに嬉しそうに肩に腕を回した。

僕は2人の親密そうな様子をツール達と見ていた。少し前の僕なら何か思う所があった様な気がするけど、不思議と何も感じなかった。

と言うか、眠気が襲ってきてそれ所じゃない。MSの操縦は初めてってこともあって疲れたみたいだ。僕はツールにシルヴィが戻ってきたら起こしてくれる様に伝えてから少しだけ寝ることにした。

……1時間後。シルヴィが戻ってきたことで僕はツールに起こされた。そして、僕はシルヴィによって正座させられて、説教が始まった。

曰く、戦闘シミュレーションもしたことがないのに戦場に出てくる  
とはどういふつもり！？曰く、思っただけで何が守れるっていうの！  
！……と……。

で、説教がまだ続くと思った直後にラミアス大尉とフラガ大尉が僕  
達のいる部屋に現れた。

「ちよつといいかしら？」

「……何ですか？こちらとしては戦闘時と作戦立案時以外ではあま  
り接触したくないのですが？」

「…嫌われてるのは分かってるつもりだが、露骨過ぎだろ。嬢ちゃ  
ん」

「…嬢ちゃん？」

「あつ…、申し訳ありません。ロックフォード一級特佐」

「……で？一体何しに來たんですか？」

「その…、キラ君にお願いがあつて…」

ラミアス大尉がそう言った瞬間、シルヴィの雰囲気が変わった。短  
い付き合いながらもヤバいと判断したのか、サイヤートル達が一斉  
にシルヴィを宥めた。そして、僕は2人の話を聞いてみることにし  
た。

「side out」

「side シルヴィ」

ブリッジを後にした私はキラ達がいる筈の部屋へと戻りました。部屋に着くと初めてのMS操縦で疲れたのか、キラはベッドで眠りについてました。

スヤスヤと眠ってたのでもう少しだけ寝かせて上げようと思ったんだけど、私が来たことでツールがキラを起こした。

どうやらキラが寝る前に私が来たら起こすように頼んでたみたい。目を覚ましたキラに私は挨拶をするとMSデッキで宣言した通り、キラの説教を始めた。

そして、説教を始めて10分程経った頃。マリューさんとセクハラ男の2人がやってきた。2人はキラに話があってきたみたい。

話の内容はキラに協力して貰えないかと言うものだった。それを耳にした瞬間、私は契約違反でもあったので一瞬だけど殺気立ったけど、それもサイ達に宥められることで抑えることができた。

そして、キラを含めてその場にいるメンバーでマリューさん達の話聞くことになった。はっきり言えば、フレイは居ても邪魔なんだけど、除け者にしたら後が五月蠅いので放置。

で、協力の内容なんだけど選択肢は2つだった。1つ目はキラが？ ストライク？に搭乗して砲撃支援をもらうというもの。2つ目はキラに？ ストライク？のナチュラル用のOSを作って貰うというもの。

もし、1つ目の条件を“お前が出なきゃ仲間も死ぬ”とか、“今度はその言いながら死んでくか？”とか言って脅してきたら2人を殺してたかもしれないけど、そんなことは無かった。

飽く迄も2つの選択肢からキラを選んで貰うと言つもの。いえ、実際はやらないという選択肢もあるから3つね。

私としてはキラにはあまり戦争に関わつて欲しくない。原作の様な強くて優しいキラも好きだけど、傷付いて欲しくもないから……。

そんな私の思いを知つてか知らずか、キラが選んだ答えは

「乗ります。いえ、僕を？ストライク？に乗せて下さい」

「こちらから頼んでおいてなんだけど、本当にいいの？」

「はい。僕には？ストライク？を操縦することができる。なら、できることをやりたいんです」

「……キラ。私は言いましたよね？撃つていいのは撃たれる覚悟のある者だけだと……」

「シルヴィ？」

「キラの考えは素晴らしい事だと思います。ですが、思いだけで覚悟がありません。MSに乗ると言うことは戦場に出ると言うこと。

それは殺す覚悟と殺される覚悟が必要と言うこと。キラには敵を……人を殺す覚悟があるんですか？」

「それは……。でも、僕はシルヴィや皆を守りたいんだ！」

「それはただ単に私達のせいに行っているのではないですか？私達を守る為にMSに乗る。私達の為に人を殺すと」

「そんなこと……！」

「私が戦場に出るのは自分の為。大切な人を傷付けられると嫌な思いをするから、自分が嫌な思いをしたくないから戦う。結局は偽善だからこそ人を殺す以上、自分が殺される覚悟をしている。他者を理由に戦う人は覚悟も決意も無く、何も捨てないで正義の心も無く、ただ戦うだけの意思もないAIと何も変わりません」

酷い事を言ってるかもしれないけど、これは真実。もし、キラがMSで戦うことを選ぶなら覚悟を持つべきだと思つての発言でもある。キラは私の言葉を受けて顔を伏せた。けど、それも僅かの時間でキラは顔を上げて覚悟を決めた眼を私に向けてきた。

「覚悟は…、あるよ。僕がMSで戦うのも皆が死んで自分が嫌な思いをしたくないからだ。その為なら人を殺すこともできる。当然、戦いに出るんだから殺される覚悟も……」

「……………その覚悟があれば及第点かな」

「え？」

「けど、自分が殺されたら悲しむ人がいる。その人に悲しまれたら嫌だから死なないっていうのも覚悟だよ？」

「……………うん。僕は殺す覚悟も殺される覚悟もある。そして、殺されない覚悟もね」

「……………だったら、私は何も言わない。キラの決めたことだから」

こうして、キラは自分から覚悟を決めて？ストライク？のパイロットとなった。ちなみに立場的には私がマリューさん達と交渉して三級特尉（少尉相当官）ということにして貰った。

そして、私はキラと一緒にMSハンガーへと向かい一緒にコミュニケーションをすることにした。

「side out」



#### 第4話 「サイレント・ラン…」（後書き）

えゝ。っと言う訳で、グダグダな本文でした。

次回は歌姫様が登場する予定です。

また、次回投稿はいつになるか未定ですが、気長に待つて頂けると幸いです。

それでは、次回をお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3660m/>

---

機動戦士ガンダムSEED Zero

2011年10月7日09時45分発行